

---

# 恋姫？むしろ三国志

浦波

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫？むしろ三國志

### 【Zコード】

Z60160

### 【作者名】

浦波

### 【あらすじ】

三国志の世界にタイムスリップした男北郷一刀？  
好き勝手に行動して原作キャラを全否定するお話

現在修正作業中です。

## 必ず読んで下せー（前書き）

ども、始めまして、浦波です。  
小説投稿するの初めてで緊張ヤバいです。

## 必ず読んで下さい

本作は作者の個人的な欲求を満たすためのものです。

この作品はアンチ要素がふんだんに含まれています。

作者は原作をプレイしたことが無いので、100%妄想と偏見で満ち満ちています。

好きな人は好きかもしませんが、嫌いな人は吐き気が催す程嫌いだと思います。

そういう方は見ないことをオススメします。

「都合主義が満載となつており、整合性がつかない文章があつてもカンベンしてください。」

また、作者はこの作品が処女作となつてゐるため、誤字脱字、おかしな文法等が多いことが予想されます。

ちなみに、設定などは、ほとんど他の作者さんの参考です。  
これらのこと踏まえて、「まあ、読んでやっていいかな?」

といつ方は読んでやってください。

ちなみに原作の欠片も無いほどに崩壊します。

# 1 (改)

今俺は非常に困っている。

何故かと言つと、ドアを開けたら知らない風景が広がっていたからだ。

オーケー落ち着け、まずは現状確認だ。

俺の名前は北郷一刀、高校受験に失敗して晴れて夢だつた二ートになつた16歳だ。

好きなことは一次小説を読むこと。  
嫌いなことは働くこと。

今更ながら自分はクズだと思えてくるが、夢だつた二ートになれたんだ、後悔は無い。  
おつと、そんなことより今を見なれば、とりあえず辺りを見てみよう。

右、左。

うん、荒野だね。

ちょっと待て、いきなり絶望を感じてきだぞ。  
何か持つていなかとポッケの中を探すと見たこともない大きなナイフが入つていた。  
なんでナイフ？

いくら一時期不良だつた俺でもこんな殺傷力抜群のアーミーナイフ?なんか持つてなかつたぞ。

ん？なんか紙も入ってる。

取りだそうとしたら突然。

「おい、お前！」

と、突然声が聞こえた。

「え？」

と、振り向くて黄色い布を身につけたゲームキャラで言つとあきらかにチソピラな三人組がいた。

しかし何か見たことのある風景だ。

と俺が悩んでいると。

一人が

「金目のもん出せ」

と安っぽそうな剣を向けてきた。

見る限りニセモンには見えない。

ていうか何か血っぽい赤黒いシミがついていた。

まさか本物の盗賊を現代で見ることになるとは思わなかつた。どうしようか思つて三人組を見ていたら、思い出した。

「これ恋姫だ！」

真・恋姫十無双。

主人公北郷一刀が三国志の世界にタイムスリップするゲームだ。

主人公の名前がたまたま同じだったからよく一次小説を読んでいた。同じ名前のクセに聖人君子みたいな性格の主人公が気に食わなかつた。

しかし、なんで俺？

自分で言うのも何だけど俺最低だよ？

小学生の頃から喧嘩、中学生の頃は放火、卒業前は殺人未遂まで起  
こした俺だよ？

と色々考えていたら。

「おい！いい加減何か言えよ！…」  
と怒られてしまった。

「えーと何のお話でしたっけ？」  
と俺が聞いたら。

「テメーふざけんじやねえ！！俺達あ黄巾党だぞ！」  
と怒鳴つてきた。

ああ、やっぱりか。と思った。

どうやら恋姫であることは間違ひ無いようだ。  
さあて、どうしようか。

原作ではこの後確か、劉備、关羽、張飛が助けにくるはずだが周り  
を見たところ誰もいない。

え、もしかして誰も助けに来ない？

えー！こんな場面だと二次小説でもだいたいは誰か助けに来てくれ  
てそいつに付いていくのがテンプレだろ？

何で俺には誰も来てくれないんだよ？！

もしかして俺が聖フランチエスカ学園の制服着ていながら？  
ていうか現実にあんな白い光っている学生服なんかあんのか？  
それどころか俺高校いってねえよ。

それとも何か、中卒じゃあここまで差別されんのか？

ふざけやかつて…！

と世の中と何かに憤つていていた。

三人組がじつと俺を見ていた。

どうやら両面相をする俺を見てキチガイか？と思つていたようだ。

その時突然ある考えが浮かんだ。

俺は何かにつまづいたフリをして尻からこけた。

「ひいいい！た、助けて下さい。お金なら全部お渡します。だから命だけばござ勘弁を！」

と俺はナイフを背中に隠して叫んだ。

それを見た三人組は満足したように俺に近づいた。

「へ、へ、へ、最初からそうしとけば良いんだよ。」

と、手を差し出してきた。

その瞬間、俺はその手をつかんでそいつを引き寄せクビをナイフで  
かっ切った。

残りの二人はとつさのことに呆然としていた。

切つた勢いで、呆然としていたデブにその死体を突き飛ばし、残つたノツボだつけ？に突つ込み首を刺し、死体でビビつっていたデブの目を突き刺し、殺した。

とつさのことだつたと言えなかうまくいった状況に満足した俺  
はその場で座り込んだ。

息を整えて周りを見た。

ちゃんと死んでいるか不安だつたからだ。

念のため死体を強く蹴つてみたが何も反応しなかつた。

ふーっとため息を吐いた。

思つたより殺人の葛藤が無い。と言つより全然無かつた。

これは自分でも意外だつた。

いくら警察の厄介になつたことがある俺でも殺人の経験は無かつたからだ。

やはり俺はどこかおかしいだらうか、と少し笑つてしまつた。

さて、また現状確認だ。

周りには黄色い布を身につけた三人の死体。血が付いたナイフを持つて少し笑つている俺。うん、どう見ても異常者とその殺人現場だ。誰がどう好意的に見ても俺が犯人だ。

まあそうなんだけど。

さあこれからどうしようと思つているとポツケの紙が見えた。そいついえばこの紙何だらう?と開いてみたらそこには。

でいあー北郷一刀君

突然だか君は恋姫無双の世界に来てもらつた。君には物質をコピーする能力とナイフをあげるからそれで頑張つてくれ。

あ、それとその世界には主人公の北郷一刀はいないから何やつてもいいよ

つて書いてあつた。

俺は10分はその紙を見たまま固まつた。

再起動したパソコンのようにゆっくりと紙を折りポツケに入れ、叫んだ。

「まずお前誰だよ!! 宛名ぐらい書いとけよ!! それと何だよ物質をコピーする能力つて!! あやふや過ぎてわかんねえよ!! 頑張れ

つて何をだよ！！」

と普段ではありえないくらい叫んだ。

その後も誰だか分かんないヤツに罵声を浴びせ続け、最後には何故か社会に対する不満をぶちまけていた。

そしてようやく收まりつていうか疲れて止めた。

とりあえずまたまた現状確認だ。

俺、血に染まつたナイフと物質をコピーする能力を持つて私服で突っ立つてゐる。

周り、黄色い布を身につけた三人の血まみれの死体が転がつてゐる。何か余計に分かなくなつてきた。

とりあえず歩くか、ついでに三人組の死体を漁つて金と食料と水をゲット。

ついでにそいつらのなるべく血に染まつてない服を剥ぎ取る。  
うん、死体に服は必要無いもんね！

と笑顔で奪つた。

さて、逝くか。違つた行くか。

と笑顔で立ち去つた。

その後ろ姿はどう見ても盗賊にしか見えなかつた。

## 1（改）（後書き）

まさかの北郷違い。最低系の主人公の明日はどうちだ。

## 2 (改)

案外「ペーは役に立つた。

村へ歩いている途中に条件等を調べた。

結果、色々分かつた。

まず、金を「ペーしてみたが本物ソックリにできた。  
手触り等も本物とまったく同じにできた。

何枚できるかやってみたらサイフがパンパンになつて止めた。  
どうやら枚数制限は無いようだ。

次に食料も「ペーしてみたがすぐできた。  
しばらく食べられるのか悩んだが覚悟を決めて食べてみたが問題無  
かつた。

次に水を「ペーしてみた。

水等液体の場合は中身だけを「ペーするのは無理で容器「」と「ペー  
するよ」うだ。ちなみに中身は問題無かつた。

次にコペーである条件を調べた。

まず、そこらの石を拾い「ペーしてみたができた。  
次に違う石を見ただけで「ペーできるかやってみた。  
できた。

どうやら見ただけでも「ペーできるらしい。

でも制限はあるらしい。

試しに銃を「コピーしよう」としたらできなかつた。

他にも電化製品等を「コピーしよう」としたけどできなかつた。

どうやらこの世界に来てから見たもの以外はできないらしい。

試しにやつて見た三人組も「コピーしよう」としてみたができなかつた。  
生物も「コピーできなこよつだ。

まあ、これだけでも十分チートなんだけビ。

とつあえず「それで飢え死には回避できんやつだ。

それに金にも困らないだろ？

まあ、これが「びじつ」か。

まあ、この能力があればまた「一ートになれる」ともできるけど今は「  
国志の時代」。

いつ戦争に巻き込まれるか分からぬ時代だ。

それにもし病氣にでもなつたら一大事だ。

この時代風邪でも死ぬことが珍しくなく、結核でも引き起こしたら  
いくら金があつても治すことができない。

やはり「」はテンプレらしく誰かの庇護でも受けるか?  
この能力があればたいていの所に土官ができるだらけど、どうかな  
ー……。

まず思いついたのは曹操の所だけど何かあのクルクルパーマの下につくのはなあ。

確かに史実では最後勝つけビ。

実際勝つたのは息子だもんない。その国も50年位で滅びたし。

その他の国もなあ。

呉とかは何か孫家以外の血は入れるべきではない。  
とかいつて排他的だしなあ。

ショクもなあ（漢字変換できませんでした）劉備とかマジ頭に花が咲いてるとしか思えない奴を奉る狂信者の集団だしねえ。

ある意味黃巾党よりタチ悪いしなあ。

まだ史実の劉備だつたらいいんだけどねえ。

史実では結構人殺してるし、ちゃんと割り切つてるから良かつたけどこの世界の劉備は完全な偽善者だもん。

それにはんな所で好き勝手に動いたら関羽に「問答無用！」とか言つて切り捨てられそうだし。

他の国もなあ。

公孫贊とかいいかも知れないけどなんだかんだ言ってアイツも善人だからなあ。

いちいち何か言ってきそうだし。だからと書いて自分が王になつても何かあつたら責任取らされるからヤダし。

できるなら誰か傀儡を王にして大陸制圧したい。

だけどなあ、この世界女尊男卑のせいか女の誇りが高いからやつてくれないだろうし。

男にしたつて上に立つという概念がないんだよなあ。

うーーん……。

「うなつたら俺がやるしかないか。

そういうキャラじゃないけどそれしかないか。

しかしそうなると原作キャラは使えないな。

だってもじこの能力がバレたら一大事だもん。

あんまし優秀過ぎる奴は何か「自分の信じる正義」とか訳分かんな  
いこと言つて余計なこと言つてきそう。

俺が欲しいのはそこそこ優秀なイエスマン。質より量。  
良く言えば第一次大戦中のアメリカ軍。  
悪く言えばスター・リン統治のソ連。

まあ、民主主義もクソも無い時代だ、問題無いだろう。

さて、だいたいの予定も決まつたし行動開始だ。

……まだかなあ村。

もう歩けないよ…。

このままじゃ行動開始前に狼にでも襲われるかも。

## 2(改)(後書き)

クズ、独裁宣言。

原作キャラ完全否定。これからどうなるのか。  
ちなみに作者はどう完結するか考えていません。

### 3(改)

やつと村に着いた…。

もづくとくとで何もする氣にならない。

今日は宿に泊まつ。

金は親切な黄巾党に貰つたし（死体を漁つた）、やつと布団で寝れる。それじゃ、お休み。

さて、朝になつた。今日から行動開始だ！

…何からしよう？ とりあえず金が必要だよな！

「パーでも良いけどそれじゃあ大金持つてたら怪しいしなあ。  
どうしよう…。

翌日、俺は総合商店を開店した。

商品は前田村中の露店や商店を徹底的に見て回り、品質の高い商品をパーして翌日自分の店で半額以下の値段で出した。

米、野菜、肉、服、日用品、武器、装飾品等何でもあり、とんでもなく安く品質も良い北郷商店は瞬く間に大繁盛した。

その勢いは凄まじく、周りの店を次々と吸収し、村には北郷の店しか無くなつた。

そして次は技術力を高めるために村中の職人を雇い入れ、大量に投資した。

中にはなかなか雇われようとしなかつた職人もいたけど、金で雇つたヤクザを連れていくとみんなすぐ契約してくれた。

やっぱりこの世は金と暴力だね！

しかしこのままでは俺も脅されたりするかもしれない、

虜げるのは好きだけど虜げられるのは大嫌いな俺は護衛団といふ名の私設軍隊をつくった。

暇な次男、三男坊や職にあぶれた者達を全員雇い入れ、その中にいた元軍人のオッサンに鍛えてもらつた。

このオッサンには俺が知る限りの近代軍隊の訓練や編隊、規律等を教えた。そして有り余る財力で訓練や装備にも金をつぎ込んだ。そのせいか私兵团に過ぎないのにまるで中世の近衛騎士団のように強く、規律正しくなつた。

ついでに馬の鐙や望遠鏡等、軍事に役立つものを職人達に開発を命じた。

鐙は比較的簡単にできたが望遠鏡はできなかつた。

そして次に、食料面を支配するため畑や田んぼを買ひあさつた。

その畑には人糞等肥料を使うことを命じた。

最初はみんな嫌がつたが怖いお兄さんとお話しでもらい分かってくれた。

その際唐辛子等を使った簡単な殺虫剤の作り方も教えた。

これで害虫被害も少しあマシになるだろう。

さらに、情報の大切さを知っている俺は忍をつくった。  
と言つても別に戦闘集団ではない。

ただ情報収集に特化した見た目ただの商人や旅人だ。  
その忍を大陸中に放つた。

これで多少は情報で優位に立てるだろう。

忍達が情報を集めている内に俺は朝廷に多額の献金をし続けた。  
やはりこんな村いや邑を一つ手に入れただけではダメだ。  
せめて大守にでもならなければ自由にできない。

こんな腐った時代だ金さえ積めば大守の座なんか楽さ。  
もしダメならこの國の大守には事故にあつてもらおう。  
なあにちょっと金を積めば人の命なんて吹けば飛ぶ程軽い時代だ。

樂勝、樂勝。

### 3(改)(後書き)

北郷の野心は村に留まらず国に。

北郷が支配した国民は幸せと言えるかは分からぬが無限の資金で不幸では無さそう。

だいたい更新ペースは1、2日に一回です。

#### 4(改)(前書き)

今回遂に本郷が国を持ちます。大丈夫かなあ?

#### 4 (改)

多額の献金の結果、俺は新野の大守となつた。

元々いた新野の大守は大守の座を譲るのを渋つたが金と暴力で黙らせた。

大守になつた俺は様々な公共事業をやつた。

まずメインストリートの拡張をして人通りを楽にして、道路の脇には北郷商会加盟の商店で固めた。

その際、立ち退きをしなかつた人達には強制的に立ち退きしてもらつた。（立ち退き料や代わりの家も建ててやつた）

次に道路の整備をして流通の流れをスムーズにした。

治安を良くするために日本でいつ交番を町中に建てた。

ちなみに新野では万引きであろうが良ければ強制労働、悪ければ死刑になる。

また、軍規ももの凄く厳しい。

軍に属するものが市民に暴力を振るつたり、商品を勝手に持つていぐ等をすると死刑になる。  
基本的死刑ばっかり。

その代わりに軍人の給料は他と比べて高い。  
ちなみに護衛団は正式に国軍に格上げした。  
それによつて人員も大幅に増員した。

やはり給料が高いということもあってヒマな人や流民も大量に入つた。

しかし、軍は良いことばかりではない。  
一度入つたら辞めることはできない。

厳しい軍規と訓練でイヤになる人もいるが逃げてもどこまでもどこまでも追つてくる。

まるでゲシュタポのように。

だが、大多数は辞めようとしない。

なぜなら福利厚生がしっかりとしているからだ。もしも死んだら遺族には給料一年分が年金として配られる。

それに軍に所属しているだけで危険手当として年金が入る。  
このように様々な特典がある軍人には人気が集中している。

ついでに海軍もつくつた。

海軍と言つても川を守るだけだが。

しかし、制海権はバカにできないので予算を大量に投入して戦艦（  
と言つてもデカくて所々鉄の装甲があるだけ）や巡洋艦、駆逐艦等  
を大量に整備した。

付近の海賊を徴発して毎日訓練に勤しんでいる。

行政面でも様々な改革をした。

今まで腐敗した政治家や貴族達は一族ごと死刑にした。  
空いたポストにはそこそこ優秀で従順な奴らを置いた。

早速まず治水を高めた。

氾濫しやすい河川は幅を広くしたり邪魔な河川は流れを変えたりし

た。

清掃事業を立ち上げて町中のゴミや汚物を掃除して町をキレイにした。

学校も建てた。

三年の義務教育を国民に課して字や計算を学ばせた。

その他にも専門分野を育てるための大学や士官候補生を育てるための国防大学を建設。

ちなみに国防大学は無料で入れるが試験が厳しい。

畑や田んぼも大幅拡張をした。

今まで荒れ地になっていた所を整地して畑を作りまくつた。  
湿地帯には田んぼを作り、食料を増産して自国用と他国に輸出する  
ものを作り続ける。

城壁にも強化を施した。

完全な要塞化を施して、監視棟を国境に建て敵の侵略に備えた。

このように様々な改革をしてきたが、なぜか反対者もいた。

既得権益を守るうとクーデターを画策しようとしてたもの達もいた  
が、秘密警察をつくり、集会をしている家に押し入り中にいた人や  
その家族もろとも死刑にした。  
これにより反対勢力は消えた。

関係ない住民にはなぜ逆らうか理解できなかつた。

なぜなら現政権ができるから國は豊かになり、食べ物にも困らなく  
なつたからだ。

それに、強い軍隊によつて黄巾党に怯える必要が無くなつた。  
ちなみに黄巾党が攻めてきたこともあつたが軍によつて皆殺しじた。

ついでに根城も焼き払つた。

攻めてきた黄巾党全員の首を門にさらし、見せしめにした。  
それでも度々攻めてくる」ともあつたがその度に死山血河が築かれ  
ていく。

そして遂には来なくなつた。

ようやく平和になつたかと執務室でマッタリとしていたら。  
エンシヨウ（漢字変換できませんでした）の使いが現れた。

何でも「董卓がムカつくからこいつを殺そう」。  
とかいう文が来た。

ついに原作とのカラミか…。

正直メンディ。

でも参加しないと後々メンディしなあ。  
ま、原作組の偵察として行くか。

それにしてもあるの軍の武将バケモン揃いなんだよな。

でもほつといたら張遼はギに行くし、呂布はショクに行くんだよな  
あ。

……どうやら紛れて殺すか？

## 5(改)

やつてきました反董卓連合!

面倒くさい原作組との戦闘&会談。

ぶつちやけ来たくなかったけど少しでも原作キャラ殺さないと不安だからねえ。

最低でも呂布と張遼は潰しとかないと後々ヤバい。

後できれば関羽と張飛。ついでに、はわわシスターズも殺れれば文句無しだ。

まあ、多分無理だけど。希望は持とう。  
さて、そろそろ到着の挨拶でもしよう。

「新野から來ました北郷です。ただいま到着しました」と門番に言った。

「」苦労様です。お待ちしておりました北郷様「  
と言つて門番は礼をした。

「では本陣までご案内します」

俺は付いて行く間ヒマなので聞いた。

「総大将は決まりましたか?」

俺の質問に門番は言いにくそうにして

「いいえ、まだ決まっておりません」と言つた。

「なぜですか?」

と聞くと。

「私には分かりかねます、是非本陣にてお聞きください。」

そう言わされたので仕方なく黙つて付いて行つた。

本陣に着き天幕をぐぐると。

分かりやすいほどに空気が緊迫してた。

新たに入ってきた俺を全員が一斉に見てきた。

中にはあからさまな嫌悪感を露わにした奴もいた。（金髪クルクル

女郎）

「あら、いかにも田舎者な顔です」と。どなたかしら？」

一番ハデな女が話かけてきた。上座にいるし多分エンショウだらう。

「新野の北郷です」

と軽く自己紹介した俺をエンショウは

「ああ、あの物売りから出世した北郷さんですの。」

とこちこち上から目線で言つて来た。

俺は一応宣伝として

「はい、北郷商会の会長、北郷です。どうぞ皆様もこの機会にぜひひ  
いきにしてください」

と営業スマイルで言つた。

「噂の何でも揃えられるといつのは本当ですか？」

エンショウが聞いてきたので営業スマイルのまま

「はい、当商会の大前提是どんな商品も揃え、どれよりも安く、高  
品質で。が決まりです」

俺はエンショウに近づき包みを渡した。

エンショウはいぶかしげに包みを解いた。

「まあ！美しい宝石細工のこと！これを私に？」

「はい、高貴なエンショウ様に相応しいものをと思い特別に作らせ  
ました。」

俺が渡したのは鳳凰をかたどつた装飾品だ。

国一番の細工師に命令した特注品。

とにかくハデに、そして高そうに作らせた。

何だかんだ言つてもエン家は大国だ。

印象は良いにこしたことはない。

それにもこの会議において多少でもイーシアチブは取れるだろ？

「素敵な贈り物をありがとうございます。田舎者にしては気が利く

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。お喜びいただけたなら望外の喜びです。」  
そう言って、俺は席に着いた。エンショウはいまだに装飾品に夢中だ。

周りのものからは警戒の目を向けられ。  
逆に曹操からは興味深そうに見られた。

その視線を俺は笑顔で受け流す。

無言の雰囲気が続いていると誰かが天幕に入ってきた。  
ピンクの髪という自然界では有り得ない髪の女、劉備だ。  
自然と全員の視線を向けられ劉備は一瞬怯むが、気を取り直しエンショウに言つ。

「平原の劉備です。ただいま着きました。」

「劉備？ ああ、北郷さんと同じ田舎者ですわね。」

エンショウはにらむように

「ずいぶん遅かったですね。あなたが一番最後ですよ？」  
エンショウの皮肉がはしる。

「うう、ごめんなさい。色々時間がかかるちやつて。」

劉備が申し訳なさそうに言つ。

「まあ良いですわ。それで、あなたの贈り物は？」

エンショウが聞いてくると劉備は

「え…贈り物…？」劉備は不思議そうに聞き返す。

「そう、贈り物ですわ。同じ田舎者の北郷さんはこんな素敵な装飾品をくださつたわ。アナタは何もないのです？」

エンショウは期待アリ気に聞くと、劉備はあたふたとして  
「うー、ごめんなさい何も用意していません。」

そう聞くとエンショウは興味を失つて

「なら良いですわ。気が利かない人ですか？」

劉備は縮こまつて席に着いた。

一日ここで切ります。

## 6(改)

「さて、全員揃つたことですし、そろそろ総大将を決めようではありますか？」

エンショウがそう言つたことにより全員が顔を引き締めた。  
「総大将に必要な高貴さ、流麗さ、そして何より美しさ。この全てを兼ね備えたものこそが相応しい。そうは思いませんか？」  
とエンショウが分け解かない選考基準を提唱してきた。

「……」

全員がエンショウに可哀想なものを見るような視線を向けた。  
「な、何ですか？ そのボケた老人を見るかのような視線は」  
さすがのエンショウでもその場の空気が分かるほどであった。

「別に、分かっているならいいじゃない。麗羽がボケているのは全員知っていることだし。」

曹操がカウンターを返してきた。

「な、なんて失礼なことを言つての華琳さんは。そんなのだから背も胸も大きくならないんですねよ。」

「そういうアナタは体ばかり大きくなつて頭に栄養がいかなかつたようね。可哀想」

「キーー、言いましたわね。言つてはいけないことを」  
など、不毛な言い争いがしばらく続いたがここで劉備が  
「あの！…そんな話より、苦しんでいる人達が大勢いるんですよ？」  
そんな時に言い争いをしている場合ですか？」

初めてまともな案が出てきた。偽善的だが。

「じゃあ、誰か総大将になるのですの」

エンショウが不満気に尋ねてきた。

「エンショウさんでいいんじゃないですか？」

劉備が投げやりに答えた。

特に反対意見もなかつたので、というかみんなヤル気なさ氣で。

「それでは、皆さんがどうしてもと詰つので私が総大将になつてあげましょ。」

エンショウが得意気に言つた。

その時、突然孫策が立ち上がり

「私たちは好きに動く」

と言つて出ていった。

他の人達も次々出て行つて、残つたのは俺、劉備、公孫贊だけになつた。

「まあ！…なんて自分勝手な人達ですの！…」

自分を棚に上げて言つエンショウ。

「まあまあ、いいじゃいか麗羽」

となだめる公孫贊。

「こうなつたのも全部アナタのせいですわ劉備さん。こうなつたらアナタが先陣を斬りなさい。」

いきなり責任転換をするエンショウ。

「え…私？」

いきなりにオロオロする劉備。

公孫贊が助けに入ろうとしたところに俺が

「では、私がその先陣を斬らせてもらいましょ。」

突然話に参加した。劉備が

「ええ！アナタが出てくれるんですか。」

心配そうにこつちを見てきた。

「はい、私が行かせていただきます」

俺が頷くと

「あら、どういった風の吹き回しですの」

エンショウが不思議そうに聞いてきた。

「男に生まれたからには先陣を斬つてみたいという思いがありまして」

と思つても無いことを言つ。

そんな俺にエンショウは

「ふーん。変わってますわね」

と小馬鹿にした顔で言った。

「その代わり兵を少し分けてもらえませんか。兵糧はいりませんので」

とエンショウに交渉する。

最初エンショウは難しそうな顔をしていたが、さつきあげた装飾品が目に入り

「しようがないですわねえ。じゃあ…兵八千を貸してあげますわ」

その交渉結果に俺は

「ありがとうございます。これで安心して先陣を斬れます」

と言い。礼をした後に天幕をくぐつた。早速準備のため自陣に帰ろうとしたら

「あ、あの」

と声が聞こえたので振り返ると劉備がいた。

「本当に大丈夫ですか？やつぱり私達も出ましょくか？」

劉備が心配そうに話しかけてきたので

「大丈夫です。ちゃんと考えがあります」

と笑顔で言い返す。

「そうですか……じゃあ頑張ってください！私にできることがあるから何でも言ってください」

そう言つて劉備は帰つていった。

自陣に帰り出陣準備を始めた。

準備中に曹操、夏侯惇、夏侯淵が来た。

「先陣を買って出たらしいわね。」

曹操が話しかけてきた。

「はい、腕が鳴りますよ」

肩に手を当て答える。

「本当にやうかしら？あきらかにしたたかなアナタが。」

曹操がニヤニヤしながら聞いてきた。

「したたかなんてそんな！私は男として先陣を斬りたかつただけですよ」

少し怒り顔をして言ひ俺。そんなことは欠片も思つちやいないけど。しかし夏侯惇は（感心）という顔をしている。

ほんとにバカなんだ……。

と心では呆れる。

もちろん顔には一切出さない。

一方曹操はニヤニヤしている。

「まあ、そういうことにしといてあげるわ。それより何か考えがあるの？麗羽から八千の兵を借りたからってシ水関は簡単には落とせないわよ？」

その質問に俺は

「まあ、秘密です。見ていてくれれば分かります」

笑顔で答えた。

「ふーん、じゃあ楽しみにしているわ」

そう言って帰つていった。

さつそく牽制してきやがつたか。

やつぱり贈り物は露骨すぎたか？

それともタイミングがまずかつたか？

まあ、いいや。

とりあえず華雄抹殺計画を進めるか。

そのために先陣を希望したんだ。

ほんとは劉備でも良いんだけどね、关羽に殺されるし、でももし殺されずに捕らえられたりしたらマズイから命のために俺が出る。まあ華雄はそんなに強くないし大丈夫でしょう。

挑発すれば出てくるだろうし。

もし出てしなかつたハンショウの兵士を突っ込ませねばいいや。

## 6（改）（後書き）

次の話からものすゞいご都合主義になります。そうしないと主人公が死んじやうので、了承ください。

## 7 (改) (前書き)

この話は好き嫌いがハッキリとするためそこんところを「」で承くだ  
さい。

## 7(改)

シ水関攻略作戦が始まった。

先陣を斬つたのはもちろん俺。

エンシヨウから借りた兵士を先頭にして突つ込む。

後ろからは「ペー」によつて増やしまくった矢を撃ち込んで反撃をくじく。

そして敵の反撃が少なくなつてきたら俺登場。

ほんとは前線なんか来たくなかつたが作戦のため仕方ない。

「おじどうした華雄！……関の中に引きこもつたままで……音に聞こえた強者と言つのはやつぱりフカシか？！」

だらうな……わざわざ正面から攻めてやつているのに門は閉じつぱなし！！なんと情けない！！貴様一端の武将なら出てきたりどうですか？！お嬢さん……」

一応挑発したけど本当に出て来るのか？

忍達からは簡単に怒り狂つといつ報告がきているけど、あからさま過ぎたか？

と心配しながら待つていると跳ね橋が降りた。

「おのれ！！！許すまじ！！！尋常に勝負せ「射て……」な！  
？ぐわああああ！！！？」

華雄が何か叫んでたけどそんなのスルーして華雄に向かって『』の一斉射。

一瞬で針ネズミになる華雄。

「跳ね橋が降りたぞ！！！全軍！！突撃！！！」

一気にシ水関に殺到する兵士達。

張遼はすでに虎牢関に撤退したようだ。

程なくしてシ水関を制圧した。

よし、何とか第一段階の華雄は殺した。  
あの後念の為首も落としたから完璧だ。  
出来れば張遼も殺りたかったけどまあ、贅沢は言えない。  
死傷者もエンショウから借りた兵に集中しているし。  
パーソナリティとは言えないが合格点は楽に取れてる。

さて、次の虎牢関攻めの準備でもしますか。

シ水関に新たにできた自陣に戻ろうとしたら誰かが既に待っていた。

遠田でもわかるピンクの髪は劉備だ。

「おや、どうしましたか？劉備さん。ここは私の軍の陣ですよ？」  
と笑顔で聞くと。

「いいえ、間違えていません。本郷さんに話があつてきました。」  
劉備が真剣そうに言つてきた。

「そうですか…それでは天幕の中で話しましょ。ここは騒がしい  
ですからね。」

周りでは重症者や軽傷者の手当で医師や兵士が動きまわっている。  
劉備も納得したようで天幕に入つていった。

今更ながら関羽もいたことに気がついた。

そりや護衛もいるか。と思いながら最後に天幕に入る。

念の為に兵士も周りに配置する。

この兵士達は護衛団の時からの付き合いで信頼も深く、強いことも  
分かる。

合図をしたら直ぐに入つてくれるよう指示する。

「さて、どういったお話をしよう？」

俺がそう聞くと何故か劉備ではなく関羽が

「お聞きしたいのです。何故あのようなことを？」

関羽が一步前へ出て言つ。

「あのような」ととは?」

俺は心底分からぬ。といふに聞とく。

「華雄に對してした」とです。一騎打ちを申し出た華雄を何故弓で射つたのですか?」

にらみつけるように関羽は言つ。

「あれは一騎打ちの申し出だつたのですか?」

てつきりかかつて來いといふ合図かと思つましたので弓を射つたのですが?」

それを聞いた関羽は何を言つたか? !と問い合わせてきた。

「あれのどこが一騎打ちの合図ではないといふのだ! ?」

と関羽が怒鳴つてきたので

「どこがと言われてもそう聞こえたので仕方ないでしょ。

それがあの方法によつて被害は最小限で済んだんですよ? アナタは例え被害が多く出ても一騎打ちをするべきだったとでも言つのですか?」

そう言つと関羽は押し黙つた。

しかし納得はして無さそつ。

すると今まで黙つてた劉備が

「本郷さん、アナタは本当に被害を最小限にするためにあんなことをしたんですか?」

今度は劉備が真剣に聞いてきたので

「はい、天地神明に誓つて、  
と真剣に答えた。

嘘は言つていない。實際そういう狙いもあつたのだから。

しばらくこつちを見ていた劉備だつたが

「そうですか、分かりました。」めんなさい天幕まで押し掛けちゃつて

劉備は納得したらしく済まなそうに言つた。  
関羽はいまだににらみけているが。

劉備達が天幕を出でていってしばらくすると今度は曹操達が来た。  
劉備達と同じようなことを言つてきたので同じように返したが曹操  
は納得しなかつたようで警戒を強めて帰つていった。

孫策は来なかつた。よほどムカついたのかそれとも軍師連中と話し  
込んでるのか？

とりあえず酒を贈つといった。

手紙に（酒好きと聞いたのでお贈りします。皆さんで飲んでください）  
と最高級の酒を大量に贈つた。

翌日わざわざ本人がお礼を言いにきた。  
よほどうまかつたのか一晩で飲んだと言い、まだ無いか？と聞いて  
来たのである分だけやつた。  
喜んで帰つていった。

ついでに公孫贊も来ていたが何か苦言を言つてきたので酒宴に招いて  
愚痴を聞いてやつたら出るわ出るわ愚痴が。  
一晩中言い続けて翌日帰つていった。何しに来たんだらう？

## 7(改)(後書き)

ついに原作キャラを抹殺しました。賛否が別れると思いますが何卒  
寛大な心を。

遂に来た。

あの化け物と対峙するときが。

千五百年以上たつた現代でさえその絶大なネームバリュー。呂布。奴だけは必ずこの虎牢関で殺さなければ。

最初は仲間に引き入れることも考えたが不安要素が多くある。

性格的にも合わないだろう。

だから不安要素は潰さなければならない。

どんな手を使つても。

今回の先陣はエンショウに譲った。

なぜなら呂布は虎牢関の扉を開けなければ出でこない。

衝車が扉を壊すまで出番は無い。

それに張遼の問題もある。

忍の情報によると張遼は後方から奇襲をかけてくるらしい。

そのため部隊を分け一正面作戦を行う必要がある。

第一部隊は呂布が出てきたら関羽と張飛より先に呂布を殺さなければならない。

第一部隊は奇襲してくる張遼を迎撃ち、張遼を殺す。

幸いなことに張遼は俺を狙つていてる。

華雄の敵討ちか知らないけど俺が気に入らないらしい。

今回ではラッキーとなる。

あつから勝手にやつて来るんだからな。

第一段階としては呂布を殺したら直ぐに洛陽に攻め入り董卓と軍師達を殺さなければいけない。

特に軍師達は危険だ。

アイツらバカみたいに頭良いからここで始末しとかないと後々ヤバい。

それにして何故だか知らないが原作キャラ達はみんな真面目に正義にこだわる。

戦争に正義も卑怯も無いのに。

やっぱこういう所はゲームキャラだからか？

ウチの軍師達は卑怯なことや姑息なことも普通に献策していくの。原作キャラ以外は案外普通なんだよな。

運動能力も考え方も。

何でだろ？……ま、いいか、全部殺せばいいことだし。

お、そろそろ始まるみたいだな！

さて、俺はまず張遼の方に行くか。

呂布はまだ時間かかりそうだし、親衛隊と共に後方を見に行く。  
さて、着いたがもう始まっているみたいだな。  
お、張遼はもう囲まれているな。それでも周りに敵を近寄らせない  
でいるからスゴイ。

やっぱ不安要素だな。

さ、そろそろ終わりにしよう。

モタモタすると呂布に間に合わなくなっちゃう。

前回の華雄と同じでも良いけど不安だから保険をかけよう。

俺は張遼から見える位置に移動する。

そして大将旗を掲げる。

それを見て張遼は真っ直ぐ俺に向かおうと前方の兵士、ていうかエンショウの兵士を斬り殺し進もうとしている。

張遼が前方しか見てないことを見計らつて後ろから吹き矢を撃たせた。

その矢は見事に張遼に刺さり張遼は倒れた。

張遼に刺さった吹き矢には致死性の猛毒が塗られているために動けなくなつた。

それでも不安だつたおれは弓兵に頭を射させ、念の為に首を落とさせた。

これで完全に死んだと安心して俺は虎牢関に向かつた。

虎牢関ではナイスタイミングらしく衝車によつて今にも門は破れそうという状況だつた。

早速俺達は布陣を整えて門が壊れるのを待つた。

そして遂に門が壊れ、エンショウの兵士が突つ込むが呂布によつて全て殺された。

そのスキに俺は借りてきた最後のエンショウの兵士に突つ込ませ時間を稼がせた。

その間に弓兵に布陣を急がせて、周りを囲んだ。

その際、他の兵士は虎牢関を突破させ洛陽に向かわせた。

董卓と軍師達、できるなら天子も一緒に殺せと命じた。

エンショウの兵士の数が少なくなつてきたら弓を構えさせ、直射と曲射で一斉射させた。

直射は直線的に真つ直ぐ呂布を狙い、曲射は放射線上を描くように狙わせた。

最初の一斉射後は逐次発射にした。

残ったエンショウの兵士にも刺さつたが気にしない。  
勿論呂布にはほとんど当たらぬが力スルだけで良いのだ。  
矢には張遼を殺した毒の十倍の濃度の致死性の猛毒が仕込まれている。

だんだんと呂布にも当たる回数が増え。

最後にはヒザを着き、倒れた。

針ネズミのようになつた呂布。

更に首を落とさせてミッショングンプリートー  
いや、まだ董卓殺つてねえけど山場は超えた。

さて、それじゃあ仕上げと行くか。

洛陽に着いたらそこは火の海になつていた。

董卓の兵士に化けさせた忍に放火を命じたからだ。

ついでに民間人を虐殺しとけと言つておいたからたまに悲鳴も聞こえる。

そこで救世主の登場だ！

忍達には撤退するよう命じて、俺達は逃げ惑う人々を救助しにいく。  
そして避難先には炊き出しや簡易テントを設置する。

こうすることによって洛陽の民からは救世主として扱われ、近隣諸国にもプラスイメージができる。

ちなみに他の軍には出来ない。

なぜなら事前に命じて敵の襲撃に見せかけて兵糧等は必要最低限を残して燃やしておいたからである。

だから自分たちだけで精一杯であり、援助する余裕は無い。

もちろん俺の軍の物資も焼いた。

変にあると怪しまれるからな。

配っている援助物資や簡易テントは

「もしも董卓の民衆への圧制のせいで餓死しそうな者が大勢いたときのために商会に注文しとした」

「董卓はもしかしたら負けそうになつて洛陽を燃やすかも知れないのでついでに注文しといた」

と表向きはそうなつている。

俺以外の国は援助をしてくれないから俺の評判は否が応でも高まる。

そして焼き出しや救助活動の最中に報告があった。

部下が董卓、力ク（漢字変換できませんでした）、陳宮の首を持つてきた。

これで完璧だ！

天子だけは五体満足のままだが、これはこのほうが良い。首だけだとメンドクサイ疑いをかけられそうだからだ。

あとはこのまま救助活動をして。

助かった人達に焼き出しを与える。

明日が楽しみだ。

今回セリフ全く無し。大丈夫か？

## 9(改)

朝になり、洛陽の被害が明らかになった。

ほぼ全ての家は無くなり、焼け焦げた死体の山が築かれていた。各国の兵士達が死体の整理と残された人達の救助活動を続けていた。俺達は負傷者の治療と炊き出し、住民達の仮の住まいを建てていた。まあ、住まいと言つてもテントの劣化版みたいなものだが、住民達はものすごい感謝をしていた。

今まで家を焼かれたことはあっても仮とは言え住居を用意する国は無かつたからだ。

オマケに食料を無料配布され、ケガの治療もしてくれるとなれば「まるで天の遣いのようだ」と人達は崇めた。

これで民衆には俺は正義の使者等のプラスイメージを持つようになり、諸国にも伝わるだろう。

ここまで援助した俺をまさかこの惨状の首謀者とは各國も思わないはず。

俺がそう思つていると、

「北郷さん」

誰かが呼んでいるので振り向くと劉備がいた。

「北郷さんはスゴイですね。こんなに援助活動をしてみんなに感謝されて、尊敬します!」

キラキラとした目で俺を見ている劉備。

「いやあそれ程でもないですよ」

少し照れたように演技して答える。

「それに救助活動なら劉備さんの軍だつてしているじゃないですか

？」

と俺が聞くと劉備は目を伏せて。

「でも救助だから……。北郷さん達みたいに炊き出しありたいんですけど……私達の分で精一杯だし。」

うなだれる劉備。

「商会への注文品が丁度良く届いただけです。

それに大丈夫です。アナタは精一杯やっています。それに救助活動だって立派な活動です。アナタは精一杯やっている」

そう励ます。

実際は励ましてなどいないが、ここで良心の呵責にでも押し潰され自分達の食料を削つてまで援助でもしたら兵達の不満は高まつても民衆は喜びさうに自分の身を削つてまで援助したと分かれば絶大な信頼を得られてしまふので今のつけこそんなことではないようにクギを刺す。

「はい！…ありがとうございます！！私も精一杯救助活動をしてきます！」

どうやらダメさせたせたようで喜んで自陣に戻つて行つた。  
ホッとしていると曹操が来た。

「アナタがこんな慈善活動をやるなんて以外ね？」

曹操が不思議そうに聞いてきた。

曹操にはぐらかすと厄介なことになりそつなので正直に話す。

「いえ、十分利益になりますよ？だってここまで援助をすればいずれこの洛陽に商会を拡大しても歓迎してくれるでしょうし、未来への投資と思えば高くはありません」

そう本音を話すと曹操は分かつたように首を振ると

「なるほどね、今は利益にならないけど将来は絶大な利益になるしこのウワサが広まれば商会全体の評価が上がる。たしかに悪くないわね」

曹操は納得したようで帰つて行つた。

実際はまだあるけど勘ずかれたくないのと本音を少しだけだして「

ました。

確かに販売網の強化や評価の上昇も役に立つが本当の狙いはこの洛陽の独占である。

今この洛陽の大守は総大将のエンショウが臨時でやっているが、大守の座は空位であることには変わらない。すでに出店準備は整っている。

本来ならばその国の大守に許可を取らなければならないが今ならドサクサに紛れて出店できる。

総大将のエンショウには借りていた兵士を全滅させたと責められたが死んだ兵士一人につき金一枚を払うと喜んで許した。その時ついでに洛陽での出店許可を得たのだ。

これで洛陽での販売を独占できる。

ちなみに今は焼けて更地になつた土地に住居用に家を建てている。工作兵達に材木を一定に切らせてそれを俺がコピーしてプレハブのようつにだが早く大量に住居ができるので住民達に次々与える。

これによつて俺への信頼は絶大になつた。

さらに、今まで取つた首と天子を朝廷に献上すると高位と汝南を貰つた。

これでさらに勢力拡大できた。

前大守のコウシンはうるさかつたので事故にあつて貰つた。さあ、これからだ。

これからは原作を一切無視する。

大陸制圧までは一切止まることはない。

この先は謀略などが主になります。そのためワンパターンになります。

汝南を手に入れた俺は早速商店を出店して新野の時のように次々と他の商店を吸収合併して独占していく。

犯罪や汚職に対しても秘密警察を動員して次々処刑して治安を上げた。

盗賊等規模がデカいものは軍を使い徹底的に駆逐した。ちなみに全員死刑。

このやり方に不満を持つものもいたが全員死刑にした。

いちいち意見なんか聞いてられない、それに大多数は賛同している。それはそうか、今までは高い税金で口クに物も買えなく、常に盗賊に悩まされていたのがいまでは税率はキツチリ決まっていて以前よりずっと安い、治安が高まったおかげで犯罪に怯える必要もない。そりゃあ現政権が多少厳しくても支持する。

多少の障害はあったが問題なく国内は安定した。

次はインフラ整備だ。

道路の幅を広くして（邪魔な家等は潰した。退去代は払った）から清掃事業を作り街並みをキレイにして伝染病予防を徹底。できれば水道も引きたいがどうやってやるのか分からぬので井戸を増やす。

その際、井戸を伝染病の危険がある開放式からポンプ式に変更。ポンプの形に鉄を鋳造するのが難しかつたが地道に冶金技術を高めておいたので何とか出来た。（金はスゴイかかりた）

次は食料面だ。

賊がいなくなつたので畑や田んぼの面積を増やし、広大な農作地を作つた。

作業員は主に流民。

重労働だが給与は高いので募集には困らなかつた。  
肥料には新野と同じ糞尿を発酵させたものを使つてゐる。  
抵抗運動ぐらいはあると思つていたが何も無かつた。  
むしろ尊敬の眼差しで見つめられた。なぜ？

軍馬の大量増産も始めた。

様々な品種を掛け合わせて軍馬に相応しい、速さ、持久力、積載量、  
丈夫さ、精神力を持つ馬を作り、鍛え、増産する。

農作業道具には鉄で出来たものを無料配布したおかげが作業効率は  
飛躍的に上がつた。  
ここでは挙まれた。

その他にも

「あつたら便利」

という道具の案を民衆に募集して色々職人達に作らせている。  
ちなみに採用されると勲章と賞金として兵士の給料一年分位が授与  
される。

次は軍事面。

これまた新野のようにヒマな奴や流民を強制的に軍に入れ、徹底的な訓練を毎日やり練度を徹底的に上げる。  
北朝鮮の第八軍より厳しく鍛える。  
そのためかたまに死人が出る。

投石機や衝車など軍事的に使える道具を大量生産する。できれば連弩も作りたいが仕組みが分からぬ。

また、海軍においても強化を果たした。

戦艦には投石機を設置して遠距離攻撃能力を高め、巡洋艦、駆逐艦にはやつと生産できた火薬を紙に丸めて作った原始的な手榴弾モードを配備した。

中には鉄片を詰めた殺傷力を高めたものもあつた。

本当は大砲が欲しかつたが実用可能なものができなかつた。

一発撃つたびに壊れる。

外洋にも耐えれるガレオン船も造るうとしたがなかなか上手くいっていない。

竜骨の作り方と帆を操る方法が分からぬからな。

次に城塞と国境の強化だ。

城塞には等間隔に投石機を大量に配備して、門は巨大な跳ね橋にした。

跳ね橋の前の堀は流れが急で渡りにくくして、川の縁には刃を仕掛けた。登りにくくした。

それと周囲に塹壕を掘り弓兵を配備して隠れながら待ち構える。

塹壕の前には大量の足が沈む位の落とし穴や鉄条網が待ち構えている。

できれば地雷を作りたいが未だにできない。

国境にも要塞と塹壕を作つて侵入を難しくした。

また、監視棟を国境に隙間無く作り、非常事には直ぐに対応できる

ようにした。

忍の数も大分増やした。

これからはこの忍が主役となるからだ。

破壊工作やハニートラップ、扇動などの訓練を徹底的にやり情報収集や裏工作の練度を鍛えた。

俺の戦略としては正面からぶつかるのは絶対勝てるという確信が無い限りやらない。

主な活動は忍を用いた情報収集、破壊活動、風評被害、扇動だ。

暗殺はリスクが高いためあまり好まない。

せっかく長い時間をかけて育て上げた忍を一発逆転のギャンブルに使うのはもったいない。

ちなみに忍はもう活動を始めている。

今は劉備、曹操、孫策の三ヶ国に麻薬を流行らせている。

アヘンやマリファナ等は今の時代でも作れるものだから純度は低いが娯楽の無い時代だ直ぐに流行るだろう。

これで多少は国内に目を向けてもらう。

医療用のモルヒネも作りたいが合成法など分からない。

科学どころか理科もできなかつた俺に期待するだけ無駄か。他にも様々な工作をしている。

例えばなぜか作物が燃やされ、その燃やしていた奴が劉備軍の服を着ていたり。

井戸に毒を投げ込まれ、その投げ込んでいた奴が曹操軍の服を着ていたり。

賊の真似をしていたのが孫策軍の格好をしていた。など様々なウワ

サが広まっている。

事実無根だが確実にウワサは広まる。

そうなればみんな疑心暗鬼になって神経過敏になる。  
そこで小さな衝突でもあれば大惨事になるだろう。

だがまだその時ではない。

まだまだもつと不安が膨張すれば破裂する時の威力が凄まじいもの  
になるのだから……。

なぜか最近俺を神とする

「北郷教」

という宗教が流行っている。

北郷教としての教義はいかに俺の治世を褒め称え、かつ、俺の邪魔  
をするものを排除する。

という完璧カルト宗教だった。

何でも俺は天から舞い降りた神らしい。自分でも初めて知った。

その神の治世を邪魔するものは悪で、排除しなければいけないらし  
い。

まあ俺としては楽でいいけど。

お布施として毎月大金が俺に奉納されるし。

しかしそうすると秘密警察の仕事が、ガクッと減った。

今じゃ開店休日状態でヒマらしい。

いいなあ、俺も入りたい。

守る対象俺だけど。

それに困ったことに俺が市場視察をしに行くと信者達が泣いて跪いてくる。これがものすごいウザイ。

何か聖書っぽい本も書いてるらしい。  
もしかして布教する気か？

内戦パートは会話がありません。

## 11(改)

早速俺は大規模な工作を開始した。

まずはエンショウだ。

王は無能でもその兵力はバカに出来ない。

まずは百姓一揆を仕掛けることにした。

畑や田んぼに大量の海水より濃い塩水をまき、大規模な塩害を発生させた。

たちまちの内に作物は枯れ、農家の収入はゼロに等しくなった。突然の塩害で国中はパニックとなつた。

食品の値段は高騰し、一般市民では手が出せないほどになつた。備蓄していた食料はなぜか塩害になる前日に燃えて無くなつた。高くても市場の品質の低い食料を買うしかなかつた。

そこに救世主が登場した。

俺の国から

「食料を売つてもいい。」

という申し出があつた。

当然エンショウは食い付いたが即答できなかつた。なぜなら単価がやや割高な価格設定だったからだ。

平均よりやや割高なだけだが膨大な量を買い揃えるために全体ではなくでもない金額になつた。

価格交渉としてエンショウ自ら交渉しに来ても話をはぐらかされたり、贈り物を貰うなどして誤魔化された。

エンショウに付いて来た交渉役が話しても一向に値切らなかつた。

エンショウ側の言い分では

「連合の際には我が軍の兵士を貸し『え、勝利に大きく貢献したのに多数の死者を出したじゃないか?』

と攻めてきたがこちらとしては

「あの時の兵の補給は大変助かりました。ありがとうございました。」

と一先ずお礼を言つ。

「しかし、兵の損害についてはあの場で話は既についており今この場には何ら関係はありません。」

毅然とした態度で返す。

エンショウ側が何か言つ前に

「それに、その事を持ち出すならば今この交渉の場を設けているではありませんか?」

本来なら最初の交渉で買えないというなら交渉を打ち切つても良いのですが、そこはエンショウさんの顔を立ててこの場を設けたのです。ですからこれ以上は譲歩はありえません」と取引の中止を匂わせた。

エンショウ側もそれ以上は言わず、國に帰つていつた。

しかし俺達以外の取引先を探したがどこも余裕は無かつた。どの国も多少の備蓄はあつたが、広大な領土を持つエンショウの國ではほとんど焼け石に水滴状態だつた。

結局、俺の國と取引するしかなく、食料は得たが莫大な金を失つた。エンショウは税金を上げて今までの生活を維持しようとしたが思うようにいかずイライラした。

一方、民衆にしたらたまつたものではない。

確かに食料は回るようになつたが未だに高い。

オマケに税金が大幅に上がつたせいで以前より貧乏になつてしまつた。

民衆の不満は溜まり、至る所で小さな衝突が起つるようになつてしまつた。

そこで俺はその衝突を大規模にするようにした。

忍達にエンシショウの兵士の格好をさせて至る所で略奪や暴行、強姦、殺人を命じた。

もちろん市民から見たらエンシショウの兵士が好き勝手に賊のように暴れまわつてゐるようにしか見えなかつた。

ついに民衆は立ち上がり、暴動を起こした。

あちこちで兵士と市民が戦い多数の死傷者が出た。

それによつてさらにお互い憎悪が生まれ、暴動は激化した。

俺はさらに戦いが拡大するように武器の横流しを始めた。

剣や槍、弓矢、弩等々な武器をタダみたま値段で大量に売つた。間に仲介人を多く挟んだので足はつかない。

更に兵士には麻薬を売り行動を鈍らせ、決着をつかせないようにした。

ついでに街では闇の食料を販売させたのでただでさえ少ない税収はさらに少なくなつた。

これによつてさらに税金は上がるという負のスパイラルが起きた。コレが原因で街でも不満が高まつてゐる。

しかし、最後には軍が勝利した。

まだ、エンシショウには倒れられては困るからだ。

一応は平和になつたが未だ火種は消えてない。

何かがあれば直ぐ元の状態に戻るだろう。

民衆もやれば結構な被害をエンショウに出せると知つたからだ。

それに塩害はなかなか收まらず来年も俺から食料を買うしかない。

今度は何を売るのだろうか？

今日も市民と軍の牽制は続いている。

この話には正義の使者や救いはありません。

まるでアメリカのメジャー やソ連の自国に対する政策のよつな話が  
続きます。

ちなみに次はエンジュツの話です。

しかし携帯で変換出来ない漢字多いな。

## 12（改）

エンジユツはそんなに難しくなかつた。

まずアイツに大好物だと聞いたハチミツを送つた。

最高級のクソみたいに高いヤツを。

エンジユツはそれにエラいハマつた。

まるで中毒のように。

実際ハチミツには麻薬が大量に含まれているため多幸感や陶酔感を得られる。

そのためかエンジユツは薬中になつてしまつた。

タダでさえ眞面目ではなかつた政務はますます遅れ、文官達や民衆は不満を高めた。

ちなみにエンジユツはすでに俺の傀儡となつた。

ハチミツと引き換えに様々な政策を実行をせいでいる。

交渉もとんでもなく楽に終わつた。

「は、早く！早くそのハチミツをくれてたもー」

エンジユツはまさにジャンキーと言ひ葉に相応しいほどに目が血走り、ハアハア言つてた。

「それでは引き換えにお願いがあるのですが？」

「俺が軽く聞いてみると

「何でも、何でもやるから早くハチミツを！」

エンジユツが今にも飛びかかつて来そうだつたので

「分かりました。それではアナタの権限全てを頂けますか？」

との無理難題をふつかける。しかしエンジユツは

「分かつた！分かつた！全部あげるからハチミツをーー！」

その答えに満足した俺はそつとハチミツの壺をエンジュッに向かって差し出すと

「ハチミツー！ハチミツー！ハチミツーーーー！」

と叫びながら俺から奪いつと壺に直接顔を突っ込んでハチミツを舐める。

しばらくして壺から出てきたエンジュッの顔は恍惚としている。やつぱり、段々麻薬濃度を上げたせいで重度の中毒になっていた。多分もう治らないだろ？

ぼーーとしているエンジュッはほつとて早速エンジュッの印鑑を使って様々な命令を発した。

まず一つは商会の出店許可である。

これは順調にいき、今ではエンジュッ支配地域で出店数を増やし、市場の支配を広げている。

もう一つは孫家への攻撃である。

史実では既に独立しているがこの世界では肝心の玉璽は洛陽陥落の内にこちらが手にして、すでに碎いた。

利用価値も考えたが今の朝廷に力も無いと考え、壊した。

そのせいで孫家はいまだにエンジュッの支配下である。

エンジュッ軍の孫家への攻撃命令は直ぐに実行された。

孫家側はいきなりの奇襲に驚き、反撃に手間取った。

だが、反撃に手間取ったのは奇襲だけのせいではない。

兵士達に麻薬が蔓延してやる気が無いからだ。

もう一つは孫家の首脳陣當はほとんど頭が働かない状態だからだ。

シ水闘の時に大量に振る舞つた酒には実は鉛が溶かされていた。

微量だつたので反董卓連合の時は気づかなかつたがその後も商會にあの酒を注文し摂取し続けたため、遂にはまず孫策がイカレた。イカレたと言つても普段より怒りやすくなり、時折意味不明なことを口走るだけなので味方は気づかなかつた。

せいぜいエンジュツから独立できないのが悔しいんだらつ。ぐらいしか考えなかつた。

俺はそこでついでに水銀も酒に混ぜてみた。

鉛と水銀のミックス酒を孫家に届け、

「これは最高級のものです。是非酒宴にでも振る舞つてください」と孫策に伝えたらそのまま出した。

普段の孫策ならありえないが今の孫策は頭が働いてない。孫策は酒宴を直ぐに開いてその酒で首脳陣で乾杯した。

その結果、首脳陣は頭がイカレ、運動機能も低下した。

そのせいかエンジュツ軍に有効な手も打てず、簡単に孫家は滅びた。本当に

「これで良いのか？」

といつぐらい簡単に滅亡した。

エンジュツがそのまま呪を支配したが実權は俺が握ってる。孫家の残党も多くいたが軍には敵わず、全員戦死した。

街には麻薬中毒者が蔓延していたので全員死刑にした。

罪名は国家荒廃罪。

国を荒廃させようとしているとして、麻薬を使つたもの、売つたもの、作つたものは死刑。という法律を制定した。

その結果、多くの人達は死刑となつて呉の経済は破綻しかけた。

そこで俺はエンジュツの国から大量に労働者を雇い入れ呉に派遣した。

エンジュツの暴政下より、北郷商会傘下の呉のほうが未来があると言ひ、呉への入国者が激増した。

これによつて呉の労働者問題は解決したが、今度はエンジュツの国が本格的にヤバくなつた。

まことに薬でイカれて暴制を敷くエンジュツに民衆は怒り、反乱を起こした。

実際には俺が命令してワザとさせただけだが。

反乱は俺主導で進められ、豊富な資金や武器を持つ反乱軍にエンジュツの兵士達は次々に降伏した。

兵士達にしてもエンジュツに忠誠を誓つたわけでもなく。

最近の暴政にはウンザリしていたからだ。

こうして反乱は被害は最小限に抑えられ、

「エンジュツの暴政に不満を高めた民衆を北郷一刀が率いて勝利へ導いた。」

という結果に終わり。幕を閉じた。

エンジュツは処刑。

そう言えども最後までエンジュツに付き従い、  
エンジュツを全肯定していたヤツだったけどアイツ何だつたんだろ  
う。

最後はエンジュツと逃亡しようとしたからエンジュツと一緒に公開処刑した。

何か原作キャラっぽかったのでとりあえず殺しといた。

エンジュツが死に、正式に俺の国になった。

昔なら秘密警察を使って反乱を企てるものや反抗的なものは始末するけどいまでは

「北郷様の治世を邪魔するものは死刑！死刑！！死刑！！！」

とか言って北郷教の信者達が危険分子を公開処刑している。

流石に俺でも街中でいきなり殺したりはしねえぞ。どびどびの俺。

一応後で

「よくぞやつてくれた」

と信者達の労をねぎつとく。

その度に信者達が泣き崩れ跪いている。

何か超恐い。

このままではちょっとした衝突が戦争になりかねないので信者達には  
「私が命じずに他国で人を殺したり、騒ぎを起こすのは許しません。  
もしも騒ぎを起こしたらそのものは反乱者とみなします」と命じた。  
そのせいか信者達がいきなり広場で公開処刑を起こしたり、国外で  
問題を起こすものはいなくなつた。

エンジュツの国を取つた俺は一旦内政に力を注いだ。

今回の作戦で少ないと言つても犠牲が出たため、國力、兵力を高める必要があるからだ。

特に旧吳領はほぼ壊滅状態だった。

家々は焼け、死体は転がり、生きている人間も大半は麻薬中毒者。という三重苦。

自分で撒いたとは言え麻薬は厄介だった。

一度ヤク中を駆除しきつたと思えばまた再発したりとキリがなかつた。

どうやら大量に隠し持つてゐるヤツがいるらしくそいつが肅正を逃れてバラまいてゐるらしい。

そいつに対する情報等は高い懸賞金を掛けた。

さらに、北郷教の信者達に

「この男がこの麻薬問題の元凶だ。こいつは悪魔だ」と悪魔認定をしたため、信者達が本当に血眼で探した。

それによつて程なくして逮捕、公開処刑にした。

この男の逮捕によつて麻薬に対する問題は激減してとりあえずは解決した。

ちなみに国内の麻薬畠や精製所は秘密警察の管轄になつていてそいつら一人一人に監視が着いてゐる。

「横領したら家族ごと死刑」

と伝えてあり、実際に転売しようとしたヤツがいたがその後そいつを見たものはいない。

ちなみに遺族は引っ越しした。どこかに。

このように罰則は厳しいがその代わり麻薬関係の仕事は賃金は破格である。

次に国力の問題だ。

流民や職にあぶれたもの達を積極的に（強制的に）雇い入れているが全然足りない。

今でも入国者や流民は大量に来ているがそれでも明らかに足りてない。

農業従事者に軍人、文官、商人、秘密警察に忍、その他諸々、職はあるけど人は全く足りてない。

現代ではうらやましい悩みだ。

ちなみに北郷教はボランティアで秘密警察の代わりをやっている。この人手不足をどう解消しようか悩む。

いつそ

「日本（倭国）に奴隸でも買い付けるか？」

と思ったが船で運ぶため数が揃え難い、言葉の問題や移民問題、習慣の違い等で面倒臭いと思い断念。

ではどうしようかと考えて出した結論はあんまり変わらず

「大陸以外の国（五胡）の人間を勧誘しよう。」

という結果になった。

最初は他の国の人間を北朝鮮よろしく拉致でもしようか思つたが労力の割には集められる数が少ないしバレたら評判ガタ落ちなためや

めた。

ベトナムやインド、モンゴル、満州、朝鮮など陸続きの国  
言葉は通じないかも知れないが日本と違つて陸続きなため輸送が比  
較的楽だ。

それに言葉は通じなくとも作業はできる。  
アメリカを見れば分かる。

これがダメなら人が多い国を占領するしかない。

もう一つの案は人口生産だが、  
今から子作りに励んでも戦力になるのは最低でも十五年くらいかか  
る。

そんなに待てん！

まあ、一応子作りは推奨しているけど。  
補助金も出しているため赤ん坊の数は増えている。  
まあ、人口は多いに越したことはない。  
ただでさえバカ広い国土だ。  
機械の無い時代では人間が全部やるしかない。

次に軍事面だ。

ぜひともダイナマイトを作りたいがTNT火薬の作り方なんて分か  
らないから断念。

当分は糞尿火薬で頑張るしかない。  
しかし一応研究はさせている。

海軍では鉄甲船を作った。

織田信長のものと違うのはガレオン船のような龍骨を持つていて、帆は可動式になっている。

さらに木ターレルを塗つて防水、フジツボが付くのを防いでる。  
しかし重すぎてやはりガレー船のようにオールが無いと遅すぎて艦隊運動についていけない。

ちなみに普通のガレオン船は一本マストまではできた。

しかし三本になると操作が途端に難しくなり、完成してない。

しかし、いくらガレオン船ができても海には出れない。  
正確なコンパスが出来ないからだ。

どう作ればいいか分からぬ。

磁石の作り方は鉄を叩くと磁力を持つ。しか分からぬ。  
とこうか磁石を安定させる方法が分からぬ。

これでは小学校の教材にも劣る精度のコンパスしかできない。  
それで海に出たら沿岸沿いを辿るしかない。

そうしないと方角を見失つてしまふ。

もしもフィリピンでも田舎したら迷つて太平洋にでも迷ひそうだ。

それには是非とも蒸気機関が欲しいけどどう作るんだろうか？

お湯を沸かしてタービンを回すのは分かるけどタービンってどう構造？

お湯つてどう沸かすの？石炭？石炭何がどうにあるんですか？

このようにまず蒸気機関の基礎が分からず断念。

あ～～Wikipediaあつたらな～。

次は農業面だ

人手不足だか作業 자체は順調そのもの。  
肥料や簡単な農薬、足踏み式収穫機のおかげで収穫量は年々増加傾向だ。

肥だめはエラい不評だが。

一応、輪作とか農業知識は基礎の基礎しか分からぬがまあそれなりにうまくいっている。

備蓄も増え、一年位なら作物が採れなくとも大丈夫になった。  
まあ、その前に俺の「コピー」で何とかなるけど。

ああそうだ、ついでに新発明、ライターができた。  
これで火を着ける時の苦労が無くなつた。  
ちなみにこれは販売していない。  
あくまでも軍事用だ。  
もしも他国の手に渡つたら面倒なことになる。  
軍事演習にのみ使われ、持ち出しへ厳禁だ。  
もししたら利敵行為で死刑だ。

ちなみにこの原理を利用してフリントロック式銃と平行してマッチロック式銃（火縄銃）の開発中だ。

それついでに大砲の試作品として竹と木で作った大砲が出来た。  
木で作った筒に竹を割つて反対に縛つた簡単なものだ。  
分かりやすく言うと剣道の竹刀みたいな感じ。

携帯式で持ち運びできるが一発撃つ度に壊れるとこりインスタント式。

だが砲弾は普通の鉄の丸いのと小さい鉄の玉のショットガン方式があり、近距離なら絶大な効果が出た。

ただし効果が出るのは5メートル以内でおまけに撃つと壊れるので手に持ちながら撃つと手が弾けるというとんでもない失敗作だった。

量産性を狙つたがやはり木じゃダメか。

最初は鉄で作るうとしたが時間が掛かりそだつたから木にしたけどやっぱダメか。

しうがない、時間が掛かつても鉄で作り。

やっぱり開発チートは魔法でもなきや口クにできないといふ現実を知つた。

一方、軍馬や農業用馬の生産は上手くいっている。

各国に巨大な牧場をいくつも作り、軍馬は血の匂いや火薬の爆発した音など戦場に慣れさせる。

農業用馬は従順にそして荷物を引いても余図無しに止まらないように戯る。

ちなみに、兵士達の鎧にも大分変化があつた。

最初は西洋式な鎧にしようとしたが、アジアでの格好は暑くて厳しいかと思いやめる。

しかし軽装すぎても困るので結論としてはマンガ版「戦国自衛隊1549」の織田軍の兵士みたいな顔も隠れる鎧にした。

騎兵隊には馬にも鎧を着けて損害を減らし、ハルバードを配備して突撃にも耐えられるスタイルにした。

弓騎馬兵には短弓を開発して騎乗しながら弓を射てるよにした。

何か見た目俺の軍はこの時代ではどっかの星の戦士達に見えてきた。  
ちなみに他国の使者が俺の軍を見て  
「北郷軍は異形の生き物を兵士にしている」  
と国に伝えたが、王はもちろん、誰にも信じてもらえなかつたらし  
い。

そろそろ大規模に動く。

曹操が麻薬や忍達の破壊活動、扇動によつて国内問題に忙しく、国外に目がいつてない内に許晶や洛陽、宛、上庸を制圧した。

一気に四力国も制圧できたのは商会の情報操作と軍の大増強のおかげだ。

商会は四力国、といつより大陸全土に広がりつつあり、その国のトップとも付き合いが多数ある。

そのため政策にも多少は食い込める。

そのせいいか官吏同士の足の引っ張り合いで賄賂などの汚職についての情報はバンバン入ってくる。

その情報を拡大して民衆に流布して不満を高め、忍によつて扇動され、兵士に変装させた忍に市民を暴行などをさせて不満を爆発させる。

そこで俺が民衆を支持して武器や資金を援助して反乱を大きくして、反乱軍が劣勢になれば軍を率いて政権を奪う。

単純だが効果的に民心と国を掌握できる。

旧政権首脳部や汚職官吏を公開処刑して民衆を満足させる。  
そして俺が政権を引き継ぐ。

文句を言つヤツはいるけどそういうヤツは政権を奪つ前に始末しつく。

政権を奪つたら従順でそこそこ優秀なヤツを県令として据えとく。

いちいち俺の直轄地にしてたら面倒臭いので防衛大学で優秀な人材を育成している。

もちろん従順なね。

次の段階は民衆の心を掴むことと、コントロールすることだ。心を掴むのは簡単だ。

インフラ整備と税金の引き下げと流通の活発化。  
公共事業により雇用の獲得で大体は掴める。

しかし一方でコントロールは難しい。  
どうやっても反発はある。

次々始末してもゴキブリみたいにわいてくる。  
そのために民衆に対して洗脳教育を開始した。

義務教育に俺の治世になつたら豊かになり治安も上がつたなど、一応本当のこと強調して教えて愛国心を強くした。

情報操作に新聞も作つた。

新聞には国内、国外の情勢を掲載している。

一応中立的な意見も書いてあるが、忍による他国の破壊活動や汚職、反乱、麻薬問題をその国の責任としてやわらかく批判している。

国内の知られたくないことは掲載していないがな。

また、読んでくれる人を増やすために小説や簡単な漫画も掲載されているので子供にも人気が高い。

字が読めない人や買ってない人のために新聞が発行されると各街や村で新聞が張り出され説明人が読み上げる。

その時、説明人には温和な子供好きなものが選ばれる。  
これは説明している時に子供が質問しても怒らないようにするためだ。

子供相手に怒つてたら誰も聞きに来なくなるし、国に対しても反感を持ちかねないからだ。

次に軍事面だ。

国が広がつたから軍人になりたいという人も増え、規模は順調に拡大している。

基本的に俺の国にいる兵士は正規軍だから職業軍人だ。だから有事の際はすぐさま行動を展開できる。

そこが他国はない強みだ。

有り余る財源のおかげで屯田兵や収穫期には帰る半軍人とは違つて、常に訓練や演習で練度を上げる。

そのため、数も優れながら練度も高く、そして装備も充実しているという大陸最強という噂になっている。

なんせ兵卒でさえ鎧を着て弓を持ち、馬に乗っているのだから機動力は半端無い。

ちなみに階級は鎧に付いている星の数で見分ける。

それでも武力だけで大陸制圧は難しい。

もしも他の国が連合を作つて攻めて来たら持久戦に持ち込めばいざれ勝てるだろうけど被害は考えたくもない。

だからこそ周辺諸国と同盟を組み、ゆっくりと支配していくのが一番早く被害が少ない。

そのために本当ならさつと滅ぼしたい劉備や曹操とも同盟を組んで友好関係を築いている。

例え同盟を組みたくないても、こっちの軍事力のほうが遥かに高い

ため組まざるを得ない。

それに、組めば経済援助や商會の出店で税収が上がるため悪いことばかりではない。

しかし、四力国を取つた辺りから曹操の警戒が以前より高まり、国境に軍勢を集結させているという報告があるためそろそろ潰したほうが良いのかも知れない。

それでは、そろそろ史実の勝者である曹操にも死んで貰おうか。  
俺の安寧の為に。

## 14 (後書き)

アイディアはまだ募集中です。  
どうかよろしくお願いします。

## 14・5（前書き）

初の主人公以外の視点です。  
曹操のキャラは想像で書いてるため、コレおかしくね？という所があると思いますがご了承ください。

## 曹操サイド

何かアヤシイ。あの北郷一刀。

確かに商人からアレだけ大成しただけあつて先を読む能力、そして商会で成した莫大な財政。利益のみを追求する考え方。どれを取つても脅威と言えるだろう。

しかし何より気になるのはあの発展の早さ。

あれは異常と言える。

いや、異常としか言えない。

いくら巨大な商会を持つているからってあの発展は早すぎる。どんな組織にも限界がある。一商会にアレは不可能だ。商会に出来るなら私はとっくに大陸を制圧出来るハズだ。北郷がそこまで飛び抜けて優秀とは思えない。

多分高度な教育を受けたのだろうが凡人の域は越えてない。それに配下に優秀な人材もいるとはとても思えない。

北郷は多分独裁者な思考をしている。

一般的には知られていないけど犯罪者や反乱者に対して苛烈と言える政策を実行している。

一族皆殺しなど残酷なことをするのは不安だからだろう。自分に仇なす者が怖いからその前に殺すのだ。

そんな人間が優秀な人材を許すハズは無い。

いつ自分の寝首を刈られるか分からぬ不安要素を残すハズが無い。では何があの発展を手助けしているのだろう。

以前は乱波を北郷の国に度々侵入させたけど、大抵はバレたのか帰

つてこなかつた。

ごく稀に帰つても「北郷教」とか言つイカレた宗教にどつぶり  
ハマつていかに北郷の治世が素晴らしいだけを伝えてきた。

どうやら大規模な諜報組織があるらしく、これ以上は人材の無駄と  
判断して北郷の国へ直接的な活動は止めた。

今は専ら隣国からのウワサ話を聞くか商会の人間に探りを入れる位  
だ。

さらに脅威なのはあの軍隊だ。

練度が物凄く高く、装備も充実している。

兵卒に至るまで鎧を着て馬に乗る。

まさしく異常だ。

常識から言つて有り得ない。どこにそんな財源や鉄や馬があるので  
ろづか?

それに尽きることの無い矢玉。

シ水関や虎牢関の時の猛烈な雨のような矢。  
華雄、張遼、呂布までを打ち負かした弓隊。

直接的な脅威としてはコレまで感じたことの無い恐怖。

あの優秀な人材を真っ向から否定する立ち振る舞いは寧ろ清々しい。  
何しろ呂布までを殺すとは思わなかつた。

あの兵力や武器なら呂布を生け捕るのは難しく無かつたハズだ。  
ソレなのに容赦なく弓で制圧してから首まで切るといった油断の無  
さ。

恐らく獅子心中の虫は飼わない派なんだらう。

ということはもし私が降参しても処刑にするだらう。邪魔でしか無  
いかね。

まあ、降参何か有り得ないけどね。

この霸王が膝を自ら折ることは天地が逆さにならうと有り得ない。

それに最近私の国のすぐ近くまで攻め込んで来た。

これは否が応でも戦うしか無いわね。

しかし、私だけで戦うしか無いとはねえ。

独立すると思つてた吳はする前にエンジュージーと潰されたし、劉備は国内問題に掛かりきりで余裕が無い。

麗羽は食料問題で手一杯。

まるでハメられたみたいね…。

まさかこれも北郷の策？

いや、確かに吳は北郷が潰したけど劉備の麻薬は国内の問題だし、麗羽のは天災だ。

それに北郷は麗羽に食料を売つてゐる。潰すのが目的なら売るハズが無い。

しかし何か引っかかる。何だろ？このモヤモヤしたものは。

あ～～～何かイライラして來た！！

何だか最近イライラするわねえ！

問題が山積みになつてゐるせいぢら？

まあ、北郷を片付ければ治るわよね？

さて、軍の用意をしなくちゃ！

いつでも北郷を攻められるよう。

今回の話は大変短いです。

これは次の話のための布石です。

所々「コレ何か可笑しきね?」という所がふんだんに含まれています。

そこそこは勘弁を

曹操の治世は今やどん底になつてゐる。

今まで反乱の気配はあつても実際には無く表面上は平和だつた。  
しかし今や国中は混乱のるつぼにあつた。

ことの発端は一人の女性であつた。

その女性は美しく聰明そうであり曹操のストライクゾーン真ん中  
だつた。

たまたま街で見掛けた曹操は一目惚れしてその女性を手に入れようと  
と声をかけた。

「ねえアナタ

「はい?」

女性は立ち止まり振り向いた。

その姿はまるで曹操の理想を体現したかのようだつた。

「とても美しいわねアナタ。どう?私のものにならない?」  
と自信満々に曹操は聞くと女性は

「申し訳ありません曹操様。私には既に夫がいて、夫を愛しています。ですからその申し出はお受けできません。」  
女性はハッキリと断つた。

普段の曹操ならここまでハツキリ言わればさすがに諦めただろうが、最近の麻薬や反乱の気配など国内問題や国外の勢力の脅威のせいかイライラしていた曹操は

「うるさいわね！　男何かより私が誘っているのだから黙つて受けなさい！！」

そう言って曹操は配下に連れてくるように命じた。

「いや！　離して！！」

女性は精一杯抵抗したが兵士には叶わず連れて行かれた。

その女性の夫は妻を連れて行かれたことを知り、城に乗り込んだ。何度も妻の返還や面会を要求をしたがついに叶わず。

妻は曹操に強姦され夫への罪悪感から、崖に身を投げた。

そのことを知った夫は嘆き悲しみ、曹操達への恨みつらみを書き残し、妻が死んだ崖に飛び降りた。

そのことを知った民衆は憤慨した。

女性は村でも有名なほど美しく、そして夫を愛していたのだ。

たまたま村から街に出かけていただけなのにそんな目にあつたことを告げられ、夫の遺書を見た村人達は悲しみ、恨んだ。

このことが国中に知れわたり人々は

「自分の娘や妻を曹操に奪われるかも知れない！」

と思うようになつた。

今までの不信と相まって曹操に対する不満が頂点に達した時、また悲劇があつた。

道端でたまたま若者が曹操についての悪口を言つていたら、そのことを聞きつけた夏侯惇は怒り狂い、ものすごい勢いでその若者を探

し、斬り殺した。

このことが決定打になつた。

この理不尽な行動について民衆は立ち上がつた。  
大規模な反乱が國中を襲い、ほとんどの住民が参加して曹操軍に襲いかかつた。

更に同盟国である北郷軍は助けに来るどころか反乱軍を支持し、兵を率いて曹操軍に攻め込んだ。

更に、北郷軍は反乱軍にも大量に武器を提供して反乱軍を強化した。

結果、曹操軍は北郷軍と反乱軍を同時に相手するといつも正面作戦を強いられた。

反乱軍だけなら勝機はあつたが北郷軍が一緒となるとどうにもならなかつた。

正面から攻めてくる北郷軍に曹操軍は様々な策を使い対抗した。しかし、結局は遙か昔から正面から敵よりはるかに大軍で攻めるのは最強と決まつてゐるのだ。

核でも無い限り。

それでも曹操軍は諦めず奮戦したがついに陥落した。

曹操や首脳陣、武官、文官にいたるまで民衆の見てる前で公開処刑となつた。

これで遙かな野心や自分なりの正義でこの乱世を平定しようとした少女の人生は終焉を迎えた。

曹操編は2話に分けます。次の話は北郷の暗躍フェイズです。

俺は曹操について攻めあぐねていた。

麻薬をばらまき、汚職を蔓延させ、作物も枯らせた。  
普通ならとっくに暴動が起きていて不思議ではないのに平和を保つ  
ている。

まさかここまで曹操の政務能力が高いとは思いもしなかった。  
さすが原作キャラ。何もかも非常識だ。

さて、どうしようか？

正面から攻めても勝てるだろうが被害も大きいだろう。  
もしかしたら原作キャラの力が何かで負けるかも知れない。  
そんなことにならないように今まで

「絶対勝てる」

という確証が無い限り攻めなかつた。  
そのためにいつも反乱を起こさせ敵兵の士気や数を減らして、反乱  
勢力を先頭に配置して自軍に被害を最小限にしてきたのにここでは  
それが通用しないとも言うのか？

いや、諦めるな。

必ずスキはあるはずだ。

じゃなきや作ればいい。

孫策の時のように何か贈り物でもして。  
でも俺が酒でも送つても飲まないだろうしなあ。

うーん……。

いや、待てよ。

別に食品にこだわる必要無いんじゃないか?  
口に入るのは食品だけじゃ無い。

「そうだあれだ！」

俺はいきなり思いついた案を実行すべく動いた。

曹操が最近イライラしたり突然怒り出したりするよ！になつた。  
周りは

「最近の国内情勢ではイライラしても不思議ではない  
と思った。

まあ、普通はいつも思うだろうが實際は違つ。

曹操は鉛中毒になつていた。

孫策の時は時間が無かつたので酒に直接入れたが曹操はむしろ時間がかかるほうが気付きにくくバレないと考え、俺は鉛の食器一式を曹操にプレゼントした。

今までも商会の会長として家具や食器などをプレゼントしていたので特別怪しまれることはなかつた。

食器には芸術のような彫刻や装飾をふんだんに散りばめた。

国内の一 流彫刻師や細工師に依頼した一点物だ。

まあこんな物でメシは喰いたくないが。

とにかく曹操の趣味に会つて細心の注意を払つたおかげで気に入つて使つてくれたようだ。

しかし問題が発生した。

鉛中毒になつても政務能力にはほとんど影響無いつてどうこうことへ。

アイツ本当に人間？

どんな精神力だよ。

分かつたことは曹操の政務能力を削いで反乱を起しにせるのは多分無理だろ？といつことだつた。

毒を盛つても何か耐えきりそう。

政務以外なら結構イライラしているし、政治とは無関係な手を使おう。

まさかここまで上手くいくとは。

曹操の好みに会つたうな忍と夫役の忍を使つた結果は簡単に予想できた。

曹操の頭の中は鉛に犯されて正常な判断ができないことは分かりきつっていたから、忍の断りも応じるはずが無く、連れ去るのは分かつていた。

そしてレイプするのも分かりきつっていた。

忍にはレイプされたショックで崖から落ちて自殺したように城の兵士に見せた。

妻役の忍はすぐにその場を撤退してウワサを広めた。

そして夫役の忍が城に押しかけ、妻役が死んだことを確認して夫役も飛び降りたフリをする。

そして存在しない村人達が憤慨しているとウワサを流して街中を動搖させ、不安や不満を高めさせる。

ここまでは俺の策だったが、まさか夏侯惇が反乱のきっかけを起こしてくれるとは思わなかつた。

初めに聞いた時はあまりの都合の良さで信じられなかつたほどだつた。

まあいい！

これで決まった。

後は何時も通りに反乱軍を支持して中枢を掌握して元の反乱軍首脳陣を始末して主導権を握る。

そして戦闘後に曹操の処刑だ。

処刑台に俺と曹操が立つ。

最も曹操は完全に縛られ跪き田隠しもされている。

俺は曹操に近づき曹操の目隠しを取った。

鉛に脳を犯されながら未だ理性を保っている目で俺を睨む。よくこの状況でにらみ返せるな。

オマケに脳がイカしてんのに。マジで人間とは思えない。このまま処刑も何か癪だな…。

そうだ。

「さて、このまま予定通り処刑を実行するが何か申し開きはあるか？」

俺が一応という感じで聞くと

「申し開き？何それ？アナタが私の国に侵略して私が負けた。コレのどこに申し開きが必要だと囁つかしり？」

曹操はバカにしたように答える。

「残念ながらそのことでは無い。お前が庶民を強姦したことについてだよ」

曹操はうつむいて黙つた。

「確かに俺は侵略した。そのことは事実だ。何の疑いようも無い。しかし、お前が女を強姦して死に追いやつたことも事実だ。オマケに夫までも」

さすがにコレは言い訳出来ないらしく黙つたままだ。

「そこでな、死に逝くお前に良いことを教えてやる」

俺が笑顔で言うと曹操は怪訝な表情でこっちを見る。

「お前最近イライラするだろ？特に理由も無く。

知ってるか？鉛つて有毒で人間の脳を狂わせるんだよ

俺がそう言つと曹操はハツとした。

俺が送つた鉛食器を使ってからおかしくなつたことに気がついた。

「貴様……、謀つていたのか。」

曹操は絞り出すような低い声で返す。

「残念、気がつくのが遅れて、もつと早く気がつけば良かったのに。まあ、忙しかつたからね。俺が仕掛けた様々な工作のせいですね。」

曹操は喋ることを忘れたのかひたすらにらんでくる。正直怖ええ。

「あ、そうだ。あの女どうだつた？いい具合だつたか？そりやあそうだらう訓練に苦労したんだぜ。色々とねえ。」

曹操は「まさか」と呟いた。

「ほら、アソコにいるよ。お前の彼女、またヤリたいか？」

そう言い。群集に指差した。

その指先には自殺したはずの曹操のストライクゾーンど真ん中の女が手を振つていた。

曹操は目を見開いて啞然とした。ビビやら混乱しているらしく瞳孔が動きまくつてゐる。

まるで空鍋の人間のようだ。

「どう？感動の再開だろ？安心しろ夫も生きてるから。まあ本当の夫じゃないけど。」

俺がそう言い放つと曹操はいきなり

「畜生！…殺してやる！…殺してやる！…殺してやる！…貴様絶対殺してやる！…！」

と叫び暴れ出した。

ありがたいことに処刑直前の曹操はついに壊れたらしく訳わかんないことを叫んでいるだけで自分の無実も主張していない。

明らかに壊れた暴君を処刑する俺は正義に見えるだろう。

処刑後、旧曹操領の大肅正が始まった。

やはり曹操のカリスマは強かつたらしく、あんな哀れな姿で処刑されたのに未だに曹操を慕い、反抗するものが多い。

最近では北郷教に任せてた肅正に久しぶりに秘密警察を使った。

久しぶりであつたせいか、秘密警察は張り切つて肅正を開始した。何か秘密警察と北郷教の間には確執があるらしく、明らかに互いを意識して肅正人數を競つてた。

今回の肅正人數は秘密警察が勝つた。

やはり本職には勝わず北郷教信者達は悔しがつてた。  
逆に秘密警察は久しぶりの出動でオマケに勝つたせいか氣分良さげだ。

別に勝つても賞金がある訳でも無いのに。

最近、主な仕事が麻薬栽培や麻薬問題の取り締まりだつたため、ストレスが溜まつてたらしい。

麻薬問題の取り締まりは警察が主にやつているため麻薬栽培という農業が飽きたらしい。

後はいつも通りの国の発展だ。

曹操側の軍人はほとんど死んだから俺の軍を分けるしかない。

まあ、軍人大募集をかけたからそんなに時間を掛けずに集まるだろう。

これで三国志で残るのは劉備だけだ。

アイツはピンチになると強そだから周りとの結束や民衆の信頼を少しづつ削つて裸の王になつた所を処刑だ。

初めての「分割はいかがでしたか?  
今後はこんな感じになります。

作者は原作をあまり知らないので郭嘉と程立の設定はオリジナルです。

郭嘉サイド

現在、私と風は放浪の旅に出ている。  
なぜ放浪などしているかと問われれば「他に選択肢が無かつたから」と答えるだろう。

まず、私達がこうなった原因から話そう。  
私と風は魏領のある小城を守っていた。  
本来ならエン紹の侵略から守るという任務があつたが、エン紹は國內問題で侵略する余裕が無くて基本暇。  
勝手に持ち場を離れる訳にもいかず、ただぼーとしてたり本を読む毎日。

そんなある日、一つの知らせが届いた。  
主君、曹操様が北郷様に敗れ処刑されたらしい。  
まあ、一度も会つたことが無いので悲しいといった感情は湧かない。  
風もどうでも良さ気だ。  
魏は新しく北郷国に変わつたらしい。  
そこで、新たな主を見るために久しぶりに2人で旧首都に向かった。

そこで見た旧首都は様変わりしていた。

かつてはお世辞にもキレイとは言えなかつた道が「ミ」一つ落ちてなく、浮浪者がそこら辺にいた裏街道は今では活気に満ち溢れ今や裏ではなくなつてゐる。

農地も拡大され、鉄で出来た農具で農民達が汗を流している。以前は暴れ川だった川は幅が広くされ、今では清流のよくな静けさだ。

街を見る限り、曹操の統治下でも見たことの無い程人々は笑顔で満ち溢れていた。

私と風は啞然とした。

「ここまで完璧な統治が存在するのか？」

と半ば呆然とする。

とりあえず気を取り直して、風と今後を相談する。

「どう思つ風？」

と私が聞くと風は

「素晴らしいと思ひますよ風は。少なくとも北郷様は暗愚ではないことが分かりましたからねえ」

と普段は寝たフリをしながら答える風も今回はずつと起きたままだ。

「まあ、新しい主君が優秀なのは良いことだ。軍の練兵場も見たが練度も高く、他の国には無い兵器も多数あつた。恐らくこの国の軍は大陸一強い。」

「それに比べて曹操は女性を強姦して民から信頼を無くし、あまつさえ民を殺した。これでは負けるのは当たり前だ。」

私が曹操をこき下ろしていると

「そうですかねえ、少なくとも曹操は君主としては一流だったし、なぜあんなコトをしたのでしょうか？」

風が不思議そうに言う。

「確かに、コレは不自然だな。

曲がりなりにも私達が仕えていた主がいきなり乱心するなんて。も

う少し情報を集めるか

情報を集めた結果、分かったのが曹操はとんでもなく追い詰められていたらしい。

麻薬問題、反乱気運、作物不良、汚職など様々な国内問題が発生してたようだ。

これではあんなコトをして仕方がないかも知れない。

しかし、気になる点がある。

曹操に強姦された女性の村を訪ねようとしたらそんな村は存在しなかつた。

なぜ？あの反乱のきっかけになつた村はどこへ？

「ねえ風……もしかして」

私が言おうとしたら

「無いのしようね。そんな村。」

答えを言った。

「といふことはその強姦された女性は仕込まれたもの

私の推理を言つと

「恐らくそうでしょうね。多分、様々な国内問題も意図的なものでしょ？」

風が付け足す。

「と言うことは犯人は北郷様」

私が結論を言つと

「恐らく間違いは無いですね」

風も賛同した。

「何と卑劣な」

私は憤つた。しかし風は

「そうですか？風はなかなか良い策だと思いますけど？」

あそこまで問題があつたら普通は狂つて仕方がないと思うだらうし、曹操のことを良く知らない人なら騙されますよ。現に風達も途中までは騙されましたし。」

「強姦の時は多分毒でも仕込まれたのかな曹操は、それで狂つたのでしょうかね。」

風は冷静に話すだけ。

私は唖然とした。

「そこまで分かつてなんで怒らない？」

私が聞くと

「そりやあ風もあんまり良い氣しないけど国を取るための戦略として見れば立派な戦略ですよ？」

多分、自軍の被害を最小限に留めるためにしたんでしょう。

風は淡々と話すだけ

「確かに自軍の被害は少ないだろうけど民は大勢死ぬ。」

私が反論すると

「北郷様は民より自分を優先したんでしょう。

それに、結果的に民を救い、幸せにしていますよ？周りを見れば分かります。みんな笑ってる。知らないところのは時に幸せなことですよ」

それともみんなに言いますか？北郷様は卑劣な手段で曹操を殺した。と、恐らく誰も信じないし、本郷様もいくらでも言い訳出来ますよ。だってもう終わつたことですから」

風は諦めたように言つた。

私も何も言えずつむづく。

「それに、これからどうするかが問題です。」

「これから？」

私が聞き返す。

「これから私達はどうするかを考えないと」

風は深刻そうに言う

「これからって？北郷様に挨拶でも行くのか？」

まあ暫定的に臣下だしね。

「いいえ、止めておいたほうがいいですね。多分殺されるでしょうし」

「殺される？どうして？」

なぜ殺されるのだろうか？まだ会つたことも無いのに

「北郷様には有名な家臣は一人もいません。」

確かに聞いたことは無い

「それがどうかしたか？なら私達が臣下に加えてもらえばいいのは？」

そうだ。有名な家臣がいないということはあまり優秀な軍師もいないハズだ。

私達に入るスキマならある。そう悩んでいると

「いえ、多分無理でしそう。北郷様は優秀な人材を嫌つています。

今までの戦を見れば分かります。

反董卓連合の時は呂布などの武将の他に文官や軍師も一緒に殺します。それに呉の攻略の際にも軍師は必ず殺していた。」

確かに今まで北郷様が新たに軍師を召し抱えたと聞いたことが無い。

今いる軍師達はみんな北郷様の領地出身か防衛大学出身者だけだ。

「外の人間は信用していないということか？」

私が聞くと

「いえ、多分北郷様は自分より優秀過ぎる人材は邪魔なのでしょう。

外様の軍師も防衛大学に行き優秀な成績なら軍師になれた例もあります。しかし、最初から優秀な人間は今まで防衛大学に入れたことさえありません。」

なぜ？という思いだつた。

「優秀な人材は取り入れるべきなのに。」

私がつぶやくと

「怖いからでしうね。自分より優秀な人間は操縦しにくいですか  
ら。まあ、確かに優秀な人材は自分に信念があるから命令に逆らい  
やすい。」

駒として考えるなら邪魔ですね。」

自分のことのように言う風。

それよりも

「このままだといずれ北郷様に殺されるということか。まあ、確かに  
自分で言うのも何だか優秀過ぎるからな。」

自嘲するように言う私。

ではどうするか。

「どこか別の勢力にでも就くか？今残っている勢力と言えばエン紹、  
馬超、劉ショウ、劉表、公孫賛ぐらいか。」

「いいえ、止めておいた方がいいですね。このままで遠くない  
内に北郷様がこの大陸を制圧するでしょう。」

「じゃあどうする？」

私が一応聞くと

風も分かつてるように言つ。

「行きましょう。大陸が平和になるまでの放浪に」

これから放浪の旅になる。

しかし多分長くは掛からずに終わるだろう。

それが良いことか悪いことかは分からないが大陸は平和になるだろ  
う。

どうでしょ、この郭嘉、程立サイドは？  
ほとんど郭嘉サイドですが。

なんか程立が敬語キャラになっちゃった。

あと前話の曹操の処刑シーンに追加をしました。  
良かつたら見てやってください。

## 17(改)(前書き)

今回一番短いです。

## 17（改）

俺は後方の安全を確保するために劉表を潰すことを決定する。

長江を挟んでの我が軍初の海軍による襄陽への上陸作戦を決定した。劉表の領土を取れば長江の制海権をほぼ独占できる。

情報では劉表は口クな海軍は持っていないから海軍戦は勝てるだろう。

しかし原作では口クに出て来なかつたモブキャラだが現実では三ヶ国を支配する大国だ。

まあ工作はしているんだけどね。

ただでさえ少ない船が原因不明の爆発でほとんど沈んだり、水夫達の間で大規模なコレラが発生した。

井戸に汚水や腐敗物を仕込んだだけだが、上手くいった。そのせいか大勢が行動不能になつたため。

海軍はほぼ壊滅した。

後はいつも通りだ。

劉表自身に問題は無くても地方に行けばバカな県令や官吏はいくらでもいる。

そいつらのネガティブキャンペーンでも貼れば民衆は不満を溜める。そこにちょっと針でつつけば爆発する。

その爆発の規模を段々大きくして国中を巻き込む。

さらに反乱軍を作らせ武器を陰ながら支援する。

そして国外にも反乱が知れ渡つたら正式な支援発表をする。普通これだけ何度も他国に支援してその国を乗っ取つたら警戒するけどそれは支配層だけだ。

一般市民には商人や旅人に変装させた忍がバラまいたプラスイメージ

ジしか伝わってない。

そのせいか市民達は俺に助けを求めてくる。

求められれば応える。

介入の理由ができたなら敵はもちろん反乱軍側の首脳陣が死んでも何か理由をつければ「反乱中のどさくさで誤魔化せる。」

そうすれば反乱軍において常に主導権を握れて反乱が成功した後もそのまま支配できる。

もちろん騒ぐヤツもいるけど騒ぐ前に家族」と始末すれば問題無い。

今回も大規模な暴動が反乱になり、反乱軍がつくられた。

その反乱軍が俺に助けを求めて俺が応えた。

俺はすぐさま海軍に襄陽攻略作戦の開始を命令した。

敵海軍の揚陸する際の抵抗はほぼ無かった。

やはりコレラと爆破工作が効いたらしい。

そのまま襄陽を制圧してすぐさま敵首都まで進軍した。

反乱軍と挾撃する形になつたため首都は瞬く間に陥落した。

その後、いつも通り劉表や首脳陣を公開処刑して民衆を満足させる。そして国を併合して支配権を取る。

税金の低下や公共事業をやり雇用を生み出す。大抵の不満はこれで解消される。

後は食料自給率を引き上げる。

空いている耕作地などいくらでもあるのだから。

そこに流民やあぶれた人間を入れて農作地を拡大させる。

後は治水を高めて災害に備える。

その際にも雇用が産まれる。

これで国中は好景気に沸く。

軍関係も強化させる。

やはり高給取りの軍人はどこでも人気だ、勝手に人が増えていく。

劉表の海軍船は民間転用できそうなもの以外は沈める。

代わりに港には俺の艦艇を投錨させる。

後は北郷教の奴らが勝手に布教活動を始めて治安を安定させる。

楽なんだけど何かねえ……。

次回は劉表サイドです。

劉表のキャラは作者の想像です。

劉表の朝はまさに悪夢と言つべきものだつた。  
悪夢は少し前に遡る。

「劉表様」

劉表付きの文官が話しかけてきた。

「江夏の庶民達が県令に対しての不満が高まつてゐるようですね。」

「なぜだ？」

劉表はめんどくさそうに聞く。大体想像がつくからだ。

「県令が独自に税を上げて庶民の生活を圧迫させてゐるからです。劉表の想像通りの理由だった。

以前にもその県令は税を一時的に上げて庶民の不満を上げていたからだ。

「どうせまた一時的な値上げだろ。そのうち下げるだひつ」

以前も不満が爆発寸前で税率を以前に戻し、暴動には届かなかつたのだ。

「はい、分かりました。」

そう言って文官は下がつて行つた。

「どうせ何時も通り。」

と劉表はほとんど危惧しなかつた。

この時に無理矢理にでも県令をクビにするなりしていたら悪夢は起きなかつただろう。

ここ江夏では不満が渦巻いてゐる。

県令が以前のように税率を上げているからだ。

これだけならば以前にもあったことだからこれ程は不満を高めないだろう。

しかし今回は税だけでは無く、汚職や暴行などを軍が堂々と行つていたからだ。

軍は否定しているが、何人も庶民が暴行や官吏に金を渡している軍人を直接見ているため、だれも信用していない。

民衆は集会を開きどうすべきか議論していた。

「以前にもあつたが今回はヒドすぎる…」

村人が顔をしかめながら言ひ。

「そうだ！本来俺達を守るべき兵士達が俺達に暴行をしてくるなんて！」

若者が怒る。

「オマケに店の商品を勝手に持つていきやがる」

商人が泣きそうに言ひ。

「劉表様にはとっくに云わつているのに何もしてくれないし

「俺達はどうすればいいんだよ」

全員が押し黙る。

すると一人が

「立ち上がろ！」

漏らすようにつぶやく。

全員に聞こえたようで注目してきた。

「何を言つているんだ。敵う訳ないだろ！」

若者が諦めたように言ひ。

すると発言した男が

「敵わないかもしれない。しかしこのままで良いのか！」

このまま県令に絞り上げられ、兵士達に怯え暮らしていくなど耐えられるか？！」

男の言葉に全員がハッとした。

「このまま何もせずに死んでいくなんて俺にはできない！耐えられない！ならせて一矢、一矢だけでも報いたい。

それに！俺達が立ち上がれば流石に劉表様も何もしない訳にはいかないだろ！」

その言葉に民衆は希望を見つけたように盛り上がった。

が、ここで若者が

「でも俺達だけでどうするんだよ。口クな武器もないのにどう戦うんだよ？」

それを聞いた民衆は静まり返った。それでも男は自信満々のようだ。

「大丈夫。何も俺達だけでやる訳じゃがない、援助をしてもらひつ」

男がそう言つと全員が

「誰に？」

と言つ空氣になる。男は

「北郷様だ。」

と言つ。

「北郷様？」

若者は聞く。

「北郷様って確か商人上がりだったよな？大丈夫なのか？」

元商人なので利益優先なのでは？と思い聞く。

「大丈夫だ。北郷様は義に厚く民衆の立ち上がりには手を貸してくださると聞く。

それにもしも劉表様が軍を向けたら俺達は皆殺しにされてしまうかも知れない、そうなつたら北郷様に助けてもらえるかも知れない。」

男がそう熱弁すると村人が

「でもそうなると北郷様がこの国を支配するんじゃないか？」

心配するように聞いてきた。

「もしそうなつても問題無い。北郷様の治世は素晴らしいものだと  
もっぱらの噂だ。」

何やら本を握りしめて熱弁する男。

周りのもの達も段々と信用するようになつてきた。

そこまで言つのならばと一番偉そうな老人が

「分かつた。北郷様に助けを請おう」

その老人の言葉で集会は終わつた。

すぐさま北郷に救援を要請したら北郷は直ぐに答え、武器や物資を送つてきた。

武器を受け取つた民衆はすぐさま発起して県令に襲撃をかけた。

いきなり襲撃を受けた県令は慌てて軍に鎮圧命令を出した。

民衆に多数の死傷者が出了ため、ますます暴動は拡大した。

これによつて劉表は江夏の軍だけでは対応できないとして国軍を派遣した。

反乱は國中を巻き込んだものになつた。

そこで北郷は本格的な反乱の支持を表明。軍を派遣して襄陽に上陸作戦を決行。

反乱軍と北郷軍で首都を挾撃した。

ほどなくして城は陥落。

劉表は広場の処刑場にいた。

まもなく処刑を受けるのを待つてゐる。なぜ自分はここにいるのか分からなかつた。

またいつもの県令の嫌がらせかと思つていたら暴動が瞬く間に拡大して、県の軍だけでは鎮圧できなくなり、仕方なく国軍を派遣したら今度は北郷軍が出てきて襄陽に上陸ってきて首都が落ちた。

反乱軍と北郷軍は結託して自分の城を直ぐ落とされて翌日では自分はここだ。

実は自分は夢を見ているのではないか？と思えてくる。

そうした妄想をしていると処刑人が現れた。

「この者は悪辣な県令を打倒しようとする国民に國軍を派遣して國民を虐殺した！！よつてこの者を死罪とする…」この判決に不服と言つものは名乗りを挙げよ！！

「處刑人が聞くと誰も名乗り挙げなかつた。

劉表はできる限りの大声で自分の無実を訴えたがだれも信じなかつた。

まるで選挙の演説カーのように無視された。

処刑は肃々と行われた。

その後は北郷が治世を行つて国は繁栄していった。

街には北郷教の信者が布教活動を熱心に行つて反乱者はいなくなつた。

その北郷教の中にはあの北郷に救援要請を訴えた男もいた。

劉表を下して三ヶ国を占領した結果、人手不足を多少なりとも解決できた。

案の定食い詰めものが多くたので農家や軍人の数が増えた。

これで食料増産のメドはついた。

何しろ国民の数は増える一方だから食料が追いついてなかつた。  
俺の「コピー能力のおかげで何とかなつてたけど流石にこれだけ増え  
ると面倒くさい。

まあ、まだ地方には盗賊がいるから軍を派遣するほうが先か?  
兵士達の日頃の訓練の鬱憤が溜まつているからストレス解消に丁度  
良いか。

盗賊討伐が終われば農地の大幅拡大だ。

アメリカの農場のようなデカい畑を作りたいけど農業機械がないか  
ら全部手作業の人海戦術だ。

確かにイギリスのヴィクトリア時代に馬車みたいな形の自動種まき機  
があつたらしいがどう作るか分からん。

とりあえず職人達に開発を命じたけど原型が分からぬから一向に  
進んでない。

それと問題は害虫被害だ。

鳥や動物は追い払えば良いけど虫は追い払えない。  
農地がデカいせいで虫に食われる作物も増えた。

一応人海戦術で手作業で虫を殺したり犯されたりした作物を取り除

いてるけど明らかに人手が足りない。

是非農薬を使いたいけど、どう作ればいいんだ？

農薬の精製法何かどこで教えてくれるんだよ。

普通科の中卒にそんなの分かるわけ無いだろ。

何かSSSのオリ主達は色々な農業法を知ってるけど普通分かるわけ無いだろあんなの。

アイツ等みんな転生前や憑依前に農業の勉強でもやつてたのか？確かに農業高校出身だつたら多少は知っているかも知れないけどそれって現代農業だろ？

ちなみに作者も農業高校出身ですがほとんどの農業に対する知識はありません。

それに問題は塩だ。

塩は戦略物資だから重要だが高い。

海沿いの国なら良いけど内陸部の人間には高級品だ。

この時代、塩の大量生産法が確立してないから更に希少品だ。

岩塩も取れるけど消費に追いついていない。

だから塩の大量生産をする為、大量の塩田を築いた。  
素人にわか知識だが上手く出来た。

次の問題は砂糖だ。

砂糖はサトウキビから作れる。

というのは知っていたがどう作れば良いのか分からなかつた。

それにサトウキビの生産法も分からないので南方の国からサトウキビと農家を買つた。

そのサトウキビを煮詰めて乾燥させたものが砂糖らしいが、現代の白い砂糖を見慣れた俺にはその黒っぽい見た目に引いた。

味は悪くはなかつた。

ちなみにそのサトウキビの残りカスでラム酒を作った。  
これはなかなかイケて商会でも人気の商品になつた。

次は軍事だ。

攻城兵器のバリスタを開発した。

演習で使ってみたがなかなか使い勝手が良く、矢先に爆薬を取り付ければそれなりの戦力になるだろう。

後、遂に銃が出来た。最初に出来たのは構造がシンプルなフリントロック式銃だつた。

フリントロックならマッチロックと違つて集団戦法が取れる。

マッチロックは集団戦法をすると火花が飛び散り、周りの火薬に引火する恐れがあるからだ。

しかしマッチロックも利点はある。

火薬に直接火が当たるから不発弾は出にくい。  
それに命中精度が高い。

など、様々な利点があるが軍はフリントロックを採用した。  
やはり構造が単純で修理や点検が楽や火種がいらないという利点が  
決め手になつた。

これで戦いの歴史は大きく変わる。

今までは弓や弩が主力だつたが高い技能を要求された。  
しかし銃ならそこまで高い技術はいらない。  
狙つて撃てば良いのかだから。  
しかし今の銃では主力にはなり得ない。

弓のように連射は利かないし、雨には使い辛い。  
それに射程距離が短いし、反動が凄い。

固定ストックは付けたがそれでも反動が強い。

戦国時代はアゴで衝撃を吸収してたけどあれは脇が鎧で邪魔でストックを長くできなかつたからだ。

そのために俺は鉄砲部隊は特別に脇が空いている鎧を作つた。  
空いている脇はチエーンメイルで防御。

ついでにこの機会に全兵士にチエーンメイルを鎧の下に着せて防御を上げた。

鎧と合わせてとんでもなく重いがその分は鎧ランニングで鍛えてもらつた。

毎日完全武装でランニング。

地獄だね。

まあ、こんな感じで順調に軍拡は進んでる。  
ついでに言えば大砲が出来れば文句無しだ。

戦艦や鉄甲船に載せればこの時代ならば海を制覇できる。

まあ、まだコンパスが出来て無いけどね。

次は最近影がめつきり薄くなつた劉備だ。

麻薬被害が響いてるのか未だに小ハイから領土拡大に動けない。

それに劉備軍の宣伝文句の「みんなが笑顔で幸せな国」は既に俺の国が実現している。

ちなみに劉備は諸葛亮経由で俺の国の裏側を知つてゐるため、人々に俺の所業がいかにヒドいかをうが証拠が無いのでほとんどの人は信じてない。

それに劉備は理想は語るが結果を出して無い。  
それが人々の信頼感を更に無くしていた。

そのため、兵や人はみんな結果を出したついで来るから未だに劉備軍は弱小勢力のままだ。

最後の問題は宗教だ。

宗教は肥大化すると内部で腐敗する。

これは歴史が証明しているため絶対だ。

しかし北郷教はいまだに腐敗していない。

いや、正確には腐敗しかけたけど身内で腐った部分を切除した。

本当なら腐敗しきった所を俺が軍で潰すはずだったのに……。

最近、昔のキリスト教みたいに宗教を押し付け始めたので邪魔になつてきて潰そうと思ったのに、潰す前に潰された。

何でも新陳代謝をしたらしく、上層部の年齢が若くなつた。

そしてそいつ等が腐敗したらまた変わる。という新陳代謝がたまに起ころる。

宗教としては素晴らしいが俺としては恨めしい。

一応神のお告げとして

「宗教を他人に押し付けてはいけない」

と告げておいた。

信者達は跪付いて

「申し訳ありませんでした」

と言つて終わりかと思つていたら

いきなり代表者が信者達を殺し始めた。

慌てて止めて

「なぜ殺した?」

と聞くと代表者は

「この者達は異教徒に北郷教への改宗を強要していました。なので始末しました。」  
と言い。また跪いた。

俺は面倒くさくなつたけど

「考えを改める者には許しを『与える』

と言つて騒動を止めた。

それを聞いた代表者は涙を流してまた跪いた。  
何でも慈悲深い俺に感極まつたらしい。

何とも面倒くさいことだ。

キリストが生きていたらこんな気分だったのか？

## 20（改）

無いとは思うが劉備の入ショクを防ぐためにショクを攻める。

現在のショクの王は劉ショウ。

コイツはあんまり有名な話を聞かないからそんなに優秀ではないと思う。

多分平凡なんだろ。

「コイツにはハーネトラップを仕掛けたことにした。

史実の劉備もハマった手を使うという少し皮肉がかかる。

劉備は諸葛亮が助けに来てくれたけど劉ショウには誰も助けにこないから引っかかったままだ。

房中術の訓練を受けた忍によって、劉ショウは簡単に籠絡できた。SEXにハマった劉ショウは政務をほつたらかしにして腰フリまくっていた。

このスキに民衆に工作を開始した。

今回は麻薬は使わない。

使えば楽に倒せるけど占領した後の麻薬問題は面倒くさい。いちいち肅正の嵐を吹かせれば国民は減るし、経済の立て直しに時間がかかる。

今回は俺にしてはまともに攻める。

多少の工作はするけど結局は正面から攻める。

なぜなら今回は

「色に狂った劉ショウを成敗する」

とこう正義の戦いをするためだ。

まず、劉ショウを政務から遠ざける。

いつもすることとて官吏や庶民に不満を高まらせる。

次に忍に劉ショウへプレゼントを求めさせる。

とんでもなく高い装飾品や家具を劉ショウにねだる。

劉ショウはこの忍に惚れてるので喜んで買ってやる。

このプレゼントを貰うために劉ショウは国庫を空にするまで使い、  
さらに足りなければ税を上げる。  
これで不満はさらに高まる。

つこでにそのプレゼントを北郷商会に注文させたり側に金を落  
とさせる。

「レだけでも介入の口実はあるけどまだ弱い。

」  
といつも使っている手を使おう。

劉ショウ軍の変装した忍達が商品の強奪や暴行をさせて軍に対する  
不信感を煽る。

さらに、備蓄食料を事故に見せかけて焼く。

これでもしも畠に何らかの被害があつたら食料は足りなくなつる。

そうなればシヨクを攻める口実に民衆の救済も足せる。

ちなみに今回畠には何もしてない。

なぜなら今年は冷夏で作物のできは悪く、自動的に食料不足に悩ま  
される。

これで民衆は飢えて誰かに助けを求める。

そこに北郷教の信者達を布教活動をさせて、希望を持たせる。

役に立たない政治家達や信用できない軍にウンザリしていた民衆は  
北郷教にハマった。

そして信者になつた民衆が北郷教に助けを求める  
それを俺がそれを聞きつけ、助けにいく。

これで俺が侵略戦争を仕掛けても民衆には聖戦に見えるだろつ。  
民衆の助けに答えて俺は軍にまず、ショウケイと江州に同時二正面  
作戦を命じた。

漢中の張魯には話をつけてあるので敵の援軍の心配はしなくていい。

突然の侵攻に劉ショウ軍は驚き、混乱した。

オマケに北郷教の信者達の手引きで軍の中枢に少数で攻め込み、將  
軍に奇襲して打ち取り、同時に大軍で攻めて陥落させた。  
瞬く間に一国を占領して北郷軍は首都成都に攻め込んだ。

その際、やたら強い弓使いの女がいたらしいが鉄砲の連射の前に死  
んだ。

何か久しぶりに原作キャラっぽい気がした。  
ちなみに劉ショウはそんな時でも忍とヤツっていた。  
いやむしろこんな時だからか。

お楽しみだった劉ショウは忍とまぐわっている最中に忍に殺され、  
哀れな最後だった。

劉ショウの死で軍は崩壊して  
ショクは占領された。

俺は成都の城から民衆を見下ろす。  
民衆は希望に満ちた目で俺を見る。

「劉ショウの支配は今終わつた！！」

ヒトラーのように手振りをしながら言つ。

「劉ショウの残した負の遺産は莫大な額だ。政治による税率、軍に

よる不信感、冷害による食料不足。数えればキリが無い

しかし、そのような莫大な負の遺産も必ず私が全て払う！！

そして、全て払い終え、必ずこのショクを豊かな国にしてみせる！！  
なぜそんなことを言えるか？どうせ口だけと諸君等は思うかも知れない。

しかし、私にはできるという確実がある！なぜか？常に私は達成してきたからだ！！

このショクよりもヒドい状況の国もいっぱいあった！

今の吳を見よ！今では貿易都市として栄えたがかつてはこの国など比較にならないほどヒドい状態だった。

国の首脳陣は頭が狂い、苛烈な政策を連発し、軍は麻薬でやる気を無くしダラケ、国民にも麻薬が蔓延してただ麻薬を買うために生きる。という悲惨な光景が日々続いていた！

しかし、今の吳は見事に栄え、食料にも困っていない！このように私には実績がある！だから！必ずこのショクも豊かな国にしてみせる！！信じてくれ！、たた私を信じてついて来てくれば必ずや豊かになる！

ショク万歳！！北郷帝国万歳！！！」

シーンと広場が静寂に包まれる。

そこに

「北郷帝国万歳！！！」

「北郷様万歳！！」

「ショク万歳！！」

「万歳！！」

万歳コールは留まることを知らず、人々は歓喜してお互い抱き合つてゐる。

よし、計画通りだ。

この演説によつて俺への信頼は手早く獲得でき、衆の俺がしたこと  
も全て旧衆の首脳陣が悪かつたことに出来た。

それに北郷帝国建国宣言もついでに言つとく。

やっぱり最初の万歳を忍に言わせて周りに言わせ易くしたのが良か  
つたようだ。

全員が追従するように万歳ホールだ。

実際にこの國を裕福にするんだし、文句は無いだろ？

今回の演説は何かしたくなつただけで深い意味はありません。

公約を果たすために俺はショクの発展を促した。

まず治安を上げる。

これをしないと始まらない。

北郷教の信者達に「国内の反乱者を皆殺しにせよ」と伝える。  
後は信者達のネットワークで隠れた反乱首謀者を処刑する。  
それに平行して広い国土に潜伏している盜賊達を軍に討伐命令を出す。

後は街に交番を建てて警官を巡回させれば治安は劇的に上がる。

次は雇用だ。

いつも通り軍や農家に入れるのはもちろん、今回は職人と医者も集める。

最近国内発展のための職人不足に悩まされてる。

様々な軍事関係の職人はいるけど民生品の職人が大量に不足していることに気付いた。

そのせいか、軍事は上昇するけど民生は前とほとんど変わつてない。これではアンバランスになつてしまふので民生用の職人を集めた。

まず開発を命じたのは冷蔵庫だった。

この時代、食品はすぐ腐るので買つたらその日に食わないといけなかつた。

だから氷を使った冷蔵庫でもそれなりに効果が期待できる。  
氷は冬の間に切り出し、地下室に砂で覆い保存しておく。

「うすれば氷が溶けるのを防げる。

次に軍事の開発だ。

ようやくコンパスが出来た。

これで海に出ても天測と合わせれば方角を見失うこととは無い。

後は大砲が出来れば海に進出できる。

一応大砲はできたが粗つた通りに弾が飛ばないし、大きさもあまりない。

これはいきなり大きい大砲は作れないと分かり、段々と大きくすることにしたのだ。

現在の大きさは20ミリ機銃弾位の大きさの砲弾しか発射出来ない。

これでは威力不足だ。

最低でも戦国時代の大筒位は欲しい。

次に軍馬の量産だ。これはなかなか上手くいってない。

確かに牧場の数や規模は拡大しているけどコピー能力が効かないので地道に増やすしかない。

即応師団には全員分配備できたけど、一般兵にはまだ半分も配備できていない。

それに数が揃つても訓練をしなければ軍馬として役に立たない。

いちいち鉄砲の音でビビられても困る。

次に医療だ。

今まで通り内科的治療も発展させると同時に外科的治療も始めさせ

た。

これは反論が多く、みんなやりたがらないので軍医に命じた。  
軍人なため俺からの命令に逆らえない。

まず、豚や馬を解剖して慣れさせた後に入間の死体を解剖させた。  
初めは失神したり吐いたりしたものも多かったが何体も切らせると  
慣れてきて平気になった。

死体を解剖させて人間の内臓の部位や名称を付けた。  
正常な人間の状態を覚えさせ、スケッチさせて本にして大量に刷ら  
せる。

外科、内科関わらず、医療に携わるものには覚えさせた。  
今はコレだけでいい。

まずは解剖学的に人間を知らせる。

技術はゆっくりと上げていけばいい。

この時代の人権という意識は薄い。実験体には困らない。

次に農業面だ。

やつと半自動種まき機が完成した。

馬車みたいなヴィクトリア時代の種まき機が出来たため、工場地の  
面積は格段に増えた。

後はコンバインみたいな収穫機が出来れば文句無い。

品種改良も進めてる。

冷害や干害に強い作物を掛け合わせて新種を現在開発中だ。  
時間はかかるが作つとけば必ず利益になる。

後はこの新種に実をよく付ける作物や害虫に強い種と掛け合わせる  
予定だ。

このようにショクでも様々な政策を約束し、そして果たしてきた。  
その俺をショクの民衆が称えるのにさほど時間はかからなかつた。  
これでショクは大丈夫だ。

次の問題は南蛮の孟獲だ。

あの頭の中が未だに石器時代なガキ。  
アイツがいきなり象で突っ込んで来るかも知れないから今の内に叩  
いておこう。

今や劉備は嘘つきのレッテルを張られてハブられている。ちょっと前までは一緒に遊んでいた子供達にまで無視されて精神的にかなりキていた。

その状況を利用して俺はある仕込みをした。

その仕込みとは大人の忍と子供の忍を劉備の国に潜入させた。入国理由は「エン紹の暴制にウンザリしたから」とあり得そうな理由をでっち上げた。

平時ならバレそうな嘘もこんな非常時では忙し過ぎて諸葛亮や鳳統も気付けない。

入国させて一月程は何もしない。

流石に入国して直ぐでは怪しまれる。家を確保して近所付き合いをして溶け込ませる。

そして劉備がヘコんで一人でフラフラしている時に話しかける。

「あの劉備様？」

しばらくぶりに村人に話しかけられて嬉しそうに返事をする

「なあに? どうしたの?」

劉備が聞き返す。

相手が子供なので屈みながら

「どうしてみんな劉備様を無視するの?」

何とも答えにくい質問を投げかける。

「う……ん、それはね……」

と答えてくそうに返す。

子供に正直に話してもどうかと思つのでじりじりか悩む劉備。

そこで子供が

「何か答えにくそっだから家で話そうよ!」

と聞いて来た。

劉備は一瞬嬉しそうにした。

こんな状況になつてからは家臣以外では他人の家にいけなかつたからだ。

しかし直ぐにバツが悪そうな顔をした。

「でも私が君の家に行つたら君も無視されちゃうよ?」

劉備が心配そうに聞く。

「大丈夫だよ! 家は村の奥にあるから人には見られないよ!」  
と笑顔で言われたので劉備も久しぶりの誘いに嬉しくなつて付いていった。

着いた家は明らかに素人の手作りと分かるほどにボロかつた。

家中には母親が一人でいて、入つて來た劉備に最初は驚いたが、  
だんだんと慣れてきたのか少しづつリラックスしていった。

劉備が何故無視されているか理由を聞いて母親は最初は和やかに聞  
いていたが北郷の話になると顔が歪んだ。

劉備が心配そうに聞くと母親は

「ごめんなさい。実は夫は北郷に殺されたんです。」  
と辛そうに言った。

母親の話を聞くと、夫は反董卓連合の時に北郷に貸された兵士の一  
人で、呂布討伐の際に突撃を命令されて突撃したところ呂布ごと矢  
で射られた。そのことだった。

それを聞いた劉備は

「そうだつたんですか…。あの時の兵士の一人だつたんですか…。」  
実際に呂布に突っ込んで行く所や味方の矢で呂布ごと殺される様子  
を直接見ているために言いづらそうだ。

あの時自分は何も出来ずにただ見ているだけだつた。

手を出しても邪魔にしかならないと分かつていたから何もしなかつ

たので罪悪感が湧いてくる。

その様子を見た母親は

「劉備様が気になさることではありません。あれば仕方なかつた。と夫の同僚が話してくれました。

夫達の犠牲が無かつたらもっと大きな被害が出ていた。と。」

母親はうつむいて

「分かつてはいるんです。夫の死は無駄では無いと、貢献したんだと。

実際北郷からは賠償金として夫の給料より高いお金が送られました。そのお金で今まで生きてこれまで生きてこれましたから感謝もしています。

しかし、夫を死なせたという事実には変わりはありません！」

母親は泣きながら力説した。

「でもエン紹国の人達はみんな「必要な犠牲だつた。」とか言うだけなんです。そんな状況に耐えられなくなつて劉備様の国に移り住んだんです。」

母親の話が終わつて劉備は

「そうですか……。でも何で私の国に？」

と不思議そうに聞いた。

隣国には馬国など他にもあつたのになぜ弱小国の「うち」に?という疑問が出た。

「私達が劉備様の国を選んだのは劉備様の理想に共感したからです。

」

と母親は答えた。

「確かに、北郷の国も同じような理想を掲げているけどそれは大多數の幸せで少數の犠牲が必要です。その犠牲になつた私達にしてみたらたまつたもんじやありません。

しかし、弱き民のための国をつくる!としている劉備様だったら犠牲は少なく出来るのではと思いました。」

母親は亡命理由を語った。

劉備は久しぶりに自分の理想を肯定されてとても嬉しかった。

「ありがとうございます！私達の理念を分かってくれて……。最近はほとんど信じて貰えなくなりましたから……。」

劉備は泣きそうな顔で答える。

「大丈夫です。少なくとも私達親子はアナタを信じています。」

その言葉を聞いて劉備は遂に泣き出した。

しばらくして劉備が泣き止んだ所で母親が

「そうだ！ご飯を食べていってください。泣いたからお腹が減つているでしょ？」

母親が聞いてきた。

確かに結構泣いたからお腹が空いている。

しかし見るからに生活が厳しそうな家を見ると遠慮してしまう。

「いいえ、実は結構大丈夫なんです。こんなこと言いくらいでけどこの家は税対策なんです。」

「税対策？」

劉備が首を傾げる。

「はい、悔しいんですが北郷から賠償金や呂布討伐に貢献したとして特別報奨金として結構なお金が貰えたので生活には困っていないんです。でも、贅沢できるほどでも無いので街外れに分からないようにボロい家を建てて実は税を払っていないんです。誠に勝手ですが、この家のことは内緒にしていただけませんか？」

お詫びと言つては何ですがたまにご飯奢りますから。」  
と言つて頭を下げた。

劉備としても脱税は困るが事情も知つていて仕方ないので

「分かりました。それじゃあ、たまにご飯をご馳走になるというこ

とで許しちゃいます。」

と笑つて答えた。

やはり久しぶりの賛同者が嬉しかったのだ。

その後、子供と遊んでいるうちに出来たご飯を一瞬に食べた。  
そのご飯は今まで食べたどのご馳走より美味しかった。

劉備は大満足で帰つて行つた。

劉備が食べたご飯には魔法の粉がかけてある。  
じきエン術のように病みつきになるだろう。

わあ、どこのまで耐えられるかな？

## 22（前書き）

今回の孟獲はオリジナル設定で原作と相違点があります。

品じておひつと書いたもののひづるにうか?

アイツ等金とかそういう概念無さそうだから商会を出店をせるとこ  
うことは無理そうだし。

忍を送り出すにしても田立つ。

南蛮は大陸だけど別の国に近いからあつちの習慣や食事を慣れさせ  
なければいけない。

幸いにも商会には南蛮出身のヤツもいるからそれは何とかなるだろ  
う。

しかし問題は南蛮に対してもう一作を仕掛けねばいいんだろう?  
兵糧攻めにしてもあの国は狩猟民族だから農業なんかしないだろう  
し。

文明が無い国つて正面から攻めるしかないのかなあ。  
かつてイギリスがアメリカ大陸見つけた時も武力で支配したしなあ。  
しかしこのまま南蛮に攻め込んでただの侵略戦争になるし、そん  
なことになつたら今まで散策アピールした

「正義の使者」

としてのイメージが崩れ落ちてしまう。

国内の混乱だつたら何とかできるけど国外に良いイメージを持たれ  
ないと、この先反乱があつても頼られないかも知れない。

まだエンショウや劉備が残つてゐるから今の時点ではできない。

仕方ないので今回は火種を残すだけにしよう。

孟獲に献上品を持って南蛮に向かつ。

事前に南蛮出身の商会員に行くことを伝えておいたので混乱は

少なかつた。

無かつた訳では無いが。

親善訪問のために護衛軍と一緒に国境を越えたらいきなり武器を向けられた。

あのガキ、俺らが来ること警備隊に伝えて無かつたな？  
こんな所で戦う訳にもいかないので

「お待ちください。私は北郷帝国皇帝、北郷一刀です。孟獲様に謁見しにきました。

事前に使者を遣わせ伝えてあります。孟獲様にお取り次ぎ願います。

丁寧に警備隊に話しかける。

警備隊は大体理解出来たのか

「これは申し訳ありません。北郷様。あいにく私どもには連絡が無かつたので侵略者かと思いました。ご無礼、申し訳ありませんでした。」

隊長らしき人が謝ってきた。

以前にもこういうことがあったのか落ち着いている。

「いえいえ、誤解が解けたようで何よりです。」

笑顔で気にして無いようにする。実際はすげえムカついた。  
しかし目的のためにこらえて

「それでは孟獲様へご案内お願ひします。」

「はいかしこまりました。」

隊長が孟獲まで案内してくれた。

行く途中に南蛮の民衆にじろじろと見られた。

それはそうだろう。

護衛軍の編成は一個連隊位はある。

まるで攻め込んで来たように見えるだろう。

警備隊の隊長からも

「物々しい護衛ですね。」

と言われた。

それに俺は

「いやあ、一応皇帝ですからねえ…。それなりに護衛を付けないと格好がつきませんからね。」

と笑いながら答えた。

この護衛には様々な意味がある。  
もちろん俺の護衛の意味もある。

それと相手を威圧するためだ。

多分、国外情勢に疎い孟獲のことだ。少数の護衛ではナメられる恐れがある。

千人規模の完全武装の連隊なら侵略と護衛の間だらう。  
これから大事な話し合いがあるのでだから。

本来なら砲艦外交で圧倒的有利に持ち込みたいけど海が無いから出来ない。

あんまりにも大軍で行くとバカが暴走するかもしれないからさじ加減が難しい。

本当は一個師団、いや一個軍で来たかった。

民衆にじろじろ見られながら孟獲の居城に着いた。  
一応王らしくみんなより高い段のイスに座っている孟獲。  
しかし体格のせいか雰囲気のせいか似合っていない。むしろ座らされている感じだ。

「アナタ誰？みいの国に何しに来たの？」

国家元首とは思えない馴れ馴れしさだ。

「初めまして、孟獲様。北郷帝国皇帝、北郷一刀です。  
事前に使者をよこして訪問の確認をしたはずですが？」

一応聞くとく。想像はできるが

「そんなんあつたつけ？みい覚えてない」

やはり忘れてたかこの牝ガキ。

「献上品として今、アナタが髪に付けてる装飾品を持って行かせましたか?」

このアマ、自分で付けてる物のこと覚えてないのか?

「ああ! そういえばコレをくれた人が何か言ってたっけ? この髪飾りが夢中で聞いて無かった」

笑顔でふざけたことを抜かす孟獲。今すぐ攻めたくなつてきたが我慢だ。

まだ攻めるのは弱い。

「まあ、とつあえず使者は役目を果たしたといつことは分かったので良しとしますか。特に被害も無いですし。」

「さて、今回の訪問の目的は条約の締結です。」

「じょりやく? 何それ?」

孟獲は分からぬ、と首を傾げた。

「はい、条約とは国同士の約束を決めることです。

今回私どもが提唱するのは不可侵条約です。」

「???

孟獲はますます分からぬ。と首を傾げる。

「不可侵条約とはお互いの国を攻めない。と約束することです。私どもはゆつくりと国内をまとめたいので戦争はしたくないのです。」

「ゆつくりと子供にも分かりやすく答えた。

「どうでしょ? この条約を締結していくださいませんか? <

ここで断つてくれても良いんだけどな。それはそれで口実になるし。

うーんと悩む孟獲。  
あと一押しか。

「ああ、やつだ。今回も献上品があるんですよ。」

俺がそういうと孟獲は

「え！ 何？ 何？」

と期待に満ちた顔で身を乗り出してくる。

「今回は特別な品ですよ？」

もつたuibつて言つ。

孟獲がワクワクという感じになる。

「では、」開帳。コレです！」

懐から出したのは銀細工が施されたライターだ。

孟獲は「何ソレ？」という感じだ。

「これは遙か北の国の魔術道具です。コレを使えば

フタを開きライターを着ける。

「火が出せるのです。」

俺にとつては当たり前だが、この時代の人間には魔術に見えるだろう。

「スゴイ！ どうなつてるの？」

不思議そうに聞く孟獲。

「先程申し上げよう魔術道具なので我々も構造は分かりません」と言つて孟獲に渡す。

孟獲は火を着けようと躍起になつている。

「どうでしょう？ 我々と条約を結んでくださいませんか？」

俺が笑顔で聞くと孟獲は

「うん！ 良いよー！」

とこひからを見ずに答えた。

「ではこちらに署名を」

と条約に関する書類を出した。すでに俺の署名はされている。

孟獲は字が書けないようなので押印で良じとした。

「では私達はこれで。お互い条約を遵守しましょう

と言つて帰る。

孟獲は未だに火が着かず悪戦苦闘している。あ、ようやく着いた。  
スゴイ嬉しそうにハシャぐ孟獲。

自分が不平等条約にサインしたにも関わらずに。

俺が出した書面には俺側からは軍隊を国境に配置しても何ら罰則は無いが孟獲側は許されず。  
無いが孟獲側は許されず。  
条約を破つたことになる。

さらに、就労目的に国境を越えることは許すが帰国目的は許さない。  
つまり俺の国に入れるけど出られない。

後、様々な俺優位な条目が記されているがアイツ等が知ることは無い。

書類は全部俺が持つていて。

国家機密文書なので見ることは出来ない。

さて、早速国境を明確にしなくては。

帰つたら国境線を作つて警備隊配置しよう。

もう人員は決まってる。

人の出入りを厳しく制限するため一重の鉄条網築いて脇には塹壕を作つて常に兵士が隠れる。  
いつでも反撃できるように。

象避けに一重鉄条網の内側には落とし穴を作ろつ。中は深く、象でも落ちるような、ついでに中にバイクを逆さに突き刺し象殺しを取り付ける。

さあ、楽しみだ。

ちょっとしたことが戦争に繋がるのは昔からあることだ。仕方無い、

仕方無い。

それで、どうするか？

南の行動が無いうちはこちらから動くことは出来ない。

今のうちに最近で力くなってきた西涼の馬超でも攻めるか？  
でも馬超に集中しているうちにもし、あのガキが何か気まぐれを起  
こして攻め込んで来たらヤバい。

確かにそれなりに堅固な防衛線を張つてゐるけどあくまで時間稼ぎ。  
大軍で攻められたら1日と保たないだろう。

ではどうするか？

簡単だ。

こちらから攻めるのではなく、彼方から攻めさせれば良いのだ。

一見難しそうに聞こえるがそんなに難しいことでは無い。俺ならね。

早速、俺は漢中にある馬超との国境線に要塞を築いた。  
ちなみに張魯は勝手に降伏した。  
先を読む能力は高いと思うけど俺に降伏しちゃダメだよ。  
旧体制とは言え、火種になるかも知れないものを懷に入れる程俺は  
自信家ではない。  
結局事故による火事で家族ごと死んだ。まあ、燃える前に死んでた  
けど。

漢中にも要塞を築いたのには訳がある。

一つ目はもちろん馬超の侵略からの抵抗だ。

モンゴルに近いから多分、騎馬民族だろう。

馬防柵だけでは直ぐに越えられるだろうから要塞を建築した。

2つ目は少しでも戦力を出させるため。

俺としてはこの防衛線で主要人物を殺しておきたいから戦力を出させるために巨大な要塞を建てた。

3つ目にはこの要塞は防衛線であると同時に支城と同じで敵を出来るだけ殺したら直ぐに侵略できるように攻略兵器も多く配備されている。

要塞の至る所に配備されているのは遂に出来たけん引式大砲。

今回の作戦にピッタリだったため、実戦テストを兼ねて大量配備した。

信管が着いてないのでただ鉄球を打ち出すだけだがその威力はバカに出来ない。

一斉に打てばまずその音で馬は恐慌状態になるだろう。

その恐慌状態に弾を打ち込めばそれなり被害は出せる。

それでも突撃して来れば鉄砲の餌食になる。

それをかいくぐっても鉄条網と馬防柵が待っている。

それに手間取つてればまた鉄砲が待っている。

ちなみに大砲を撃つている間は弓による曲射面制圧も行っている。

さらに、国境線は森に囲まれているので両脇の森に斬壕を掘つて鉄砲部隊が待つている。

さて、国境の守りは万全になつた所でそろそろ工作を始めよう。

こんなに用意したのにお客様が来られなくては意味がない。ぜひ宣伝しなくては。

俺は先ず、馬超の備蓄庫にネズミを放った。

今まで火を放つてたけど今回はネズミの方がいい。

ある程度食い荒らし、見張りの怠慢に見せ掛けるのが容易い。

それに、全部無くなるよりある程度残つてほつが後々都合が良い。

次に馬超の領土全体にイナゴの群れを放つた。

なぜこんなことが出来るかと言つと「コピー」出来たからだ。イナゴを。

以前にやつた実験では生物を「コピー」出来なかつたけど、その後も実験を繰り返した結果、生物兵器と思えるものは「コピー」出来た。人間や軍馬は「コピー」出来なかつたがネズミやイナゴと言つた害獣は出来た。

なぜ出来たかと言つと多分、害獣は生物兵器と見ることが出来るが、人間や馬は出来なかつたからだろ？

馬超領に放つたイナゴは瞬く間に増殖して穀物を食い荒らした。もちろん被害は馬超領に留まらず、こっちにも来やがつた。

こっちには来ないよつて思いながら「コピー」したけどやつぱりダメだつたらしい。

これで思い通りに動いたらほとんど無敵だがやつぱりそんなに甘く無いか。

しかし俺の領は被害拡大を防ぐためにイナゴの進路の畠はみんな燃やした。  
卵とか残つてたら怖いし。

今回の被害で穀物全体の30%がダメになつた。

農家には大打撃だが被害手当や補助金でもあやつていけるだろ？  
それに備蓄はたつぱりあり、1年は何も採れなくともやつていける。  
しかし、馬超は事前調査では備蓄もそんなに多くなく、その備蓄もネズミにやられてさらに少なくなつていてる。

ほとんどの穀物がやられてしづらくなれば少ない備蓄で食いつなぐしかない。

オマケにもうすぐ冬がやって来る。

この状態で冬に突入したら大量の餓死者が出るのは間違い無いだろう。

このまま吃えるのを待つか、それとも裕福な隣国に攻めに入るか。  
まさに背水の陣。

まあ、どうするかは明白だが。

次回は馬超サイドです。

馬超のキャラはオリジナルで作者の妄想で書きました。ちなみに馬タイはこの作品ではモブです。

最近、北郷一刀という男の話をよく耳にする。  
何でもこの大陸の救世主で神の化身らしい。

北郷の国では人々は笑顔に溢れ、職に困らず、餓死者が出ないらしく、強い軍隊を持ち如何なる侵略も許さない。  
ところまるでおどき話のような国であると人々は話す。

そのせいか庶民達はこぞって北郷の国に移住しようとする。  
そんなことをされても税収が減るから何とか引き止める。  
しかし引き止めは難しい。

私では北郷のような国家体制は到底不可能だからだ。  
誰だつてよほどの愛着が無い限り今いる貧弱な祖国より豊かな隣国に行きたがる。

北郷国は移民に寛容だ。

直ぐに住民登録をしてくれて職を紹介してくれるらしい。  
そりやあ誰だつて行きたがる。

私だつて庶民ならそつちに行きたい。

しかしそれは叶わない。

私は母様の死後、後を継ぎこの馬国の王に就いたのだから。

母様の死は曹操の謀略だと噂を聴いた時、曹操に復讐してやるうと国を大きくしたけど今では足枷になつてゐる。

なぜなら私の統治能力では支えきれない程国が大きくなり過ぎた。前の武威と天水の一ヶ国なら何とかなつたけど今は安定と長安の一ヶ国も合わせて四ヶ国になつてしまつた。

それに、領土を大きくした目的の復讐も対象の曹操は既に北郷に討たれ死んだ。

周りは北郷<sup>モシゴル</sup>国に囮まれていて自由に動けない。

後ろは五胡<sup>モシゴル</sup>が伺つてゐる。

まさに四面楚歌。

今までマズイのにさらなる災厄が降りかかつた。

発端は備蓄庫のネズミ騒ぎだつた。

まあ、たまにある警備の当番兵の怠慢だがそこまで騒ぐ程ではない。作物のつき具合も悪くないし来年の収穫期までは保つだろう。

最初はそう思つていた。

しかし、悪夢が始まつた。

初めは文官の一言から始まつた。

「馬超様、最近各地でイナゴの被害が少數ですが発生してます」文官が事務的に報告していく

「大丈夫なのか？大発生の危険は無いのか？」私が心配そうに聞くと

「大丈夫ですよ。この位の規模ならたまにある程度です。このまま

鎮火するでしよう。」

文官が心配無さ気に言つ。

文官が本当に心配無さそうなので安心してその場は終わつた。

この時手を打つべきだったのだろう。

それから程なくして文官が慌ててやつて来て

「た、大、大変です！イナゴが大発生しました！！」

その報告で私は啞然として

「なぜだ、発生はごく小規模ですぐ終わるとこの前言つていたではないか！それともお前の報告が間違えていたのか？」

文官を問い合わせたら

「とんでもない！私の今までの経験からいってこのまま終わるはずでした。

しかし残念ながら予想外なことにイナゴは大発生しました。申し訳ありません。」

文官は申し訳なさそうに謝る。

本当に予想外らしそうだったのです

「いや、仕方ない。イナゴは天災のよつなものだ。誰も予測出来ない。」

私は頭を抑えてうなる。

「それで、どの位の規模なんだ？」

私が確認のために聞くと文官は

「残念ながら全地域です」

それを聞いた瞬間時が止まつた。

私がおそるおそる聞いた。

「全…地域？」

ウソだと黙ってくれ、と視線を向けた。

「はい、馬国全域です。」

残念ながら希望は絶たれた。

「なぜだ？全地域なんかおかしいじゃないか？普通一ヶ所に集まるだろ？」

「はい、例年なら一ヶ所もしくは一ヶ所に被害は集中します。しかし今回は馬国全域に広まりました。それどころかこのままでは隣国にも被害が行くでしょう。」

文官も信じられないように言つ。

「隣国というと北郷国にもか？」

「はい、それとエン紹様の領土にも被害が行くでしょ。」

文官は絶望的に言つ。

「ということは隣国に食料援助は期待出来ないな。」

私も絶望した。

「どういたしましょう？」

文官は対処を聞いてきた。

「どうすることも出来ないだろ。イナゴが出たら去るのを待つしかない。一応兵士達も動員して出来るだけ駆除しね。」

そう伝えると文官は礼をして出て行つた。

最初は畠を焼くことも考えたがそれでは全部の畠を焼く必要がある。備蓄が乏しい今、無事かも知れない作物まで焼くことは出来ない。

しばらくしてイナゴは去つた。

しかしその被害は凄まじいものだつた。

国全体の穀物、実に70%を食い荒らした。

残つた穀物は枯れないうちに速やかに収穫した。

しかし、まだ時期が早かつたのか質は散々なものだつた。

一気に食料難に陥つた。

少ない備蓄を少しずつ配給して飢えを凌ぐが明らかに足りない。

子供でも分かる位足りない。

ここでも大国になつたツケが来た。

以前の一国なら現在の備蓄量でも何とかなつた。しかし今はその倍。とても間に合わない。

隣国に救援を申し込んでもエン紹も北郷も「自國で精一杯」との返事だった。

そりやあそつか。

エン紹の国はただでさえ塩害で苦しいのにそこにイナゴだもんなあ。まあ、公孫贊の国を取つたおかげでこつち程はビドくないがな。

一方北郷の国はそこまで影響は無かつたらし。

いち早くイナゴを焼き殺したおかげで内陸部までは侵攻されなかつた。

さすが備蓄が充分な国は手だてが早い。

まあ、それでも援助は出来ないと言われた。自國が最優先だもんな。

さて、これからどうするか？

このままの配給量や何とか収穫した穀物では冬を越せない。仮にこのまま冬を迎えたら兵士までも餓死者が大勢出てしまつ。そんなことになつたら隣国や五胡に攻められるのがオチだ。

ならどうする？

そう悩んでると

「今すぐ隣国に攻め入るべきです。」

いつの間にかいた文官が言った。

「攻め入る？」私は聞いた。

「現状ではまだ兵士に対して食料は行き渡つています。今なら戦えます。」

「どに？」

必勝とは言えないが多分勝てるエン紹か？

それとも未だ負け無しの未知数の北郷か？

そう考えていると

「何も勝つ必要はありません。」

と文官が言った。私は不思議そうに聞き返す。

「勝たないのに戦をするのか？」

「はい、まず前提条件として私達は食料が足りません。ここまでは良いですか？」

私は頷いた。

「私達が欲しいのは領土ではなく食料です。つまり攻め入って備蓄庫の食料を奪つてすぐに撤退すればいいのです。」

文官にそう言われ「なるほど」と思った。

確かに私が欲しいのは領土ではなく食料だ。

何も敵地奥深くに侵攻する必要はない。

ただ食料奪つて逃げればいい。

それに領土を取つても私ではこれ以上運営出来ない。

これはイケる。そう確信した。

「それでどつちを攻めるんだ？」

文官に攻略目標を聞いた。

「北郷様がよろしいかと」

文官は未知数の北郷を推してきた。

「なぜ北郷なんだ？ エン紹なら確実に勝てるだらう？」

そう、エン紹なら噂ではそこまで強くない。

「エン紹様なら確かに勝てるでしょう。しかし今回の目的は食料です。エン紹様の国は食料難に苦しんでいるため余り備蓄は無いでしょう。

しかし北郷様なら余裕があるので備蓄も相当あるでしょう。

それに、軍事的に見ても良いと言えます。北郷様の国は今や遙か大国。反撃に移る行動は遅いと思われます。」

なるほど、と私が思つていると

「それに北郷様は今南蛮とにらみ合つてゐる最中。南に多数の兵を向けてゐるでしょう。ですから今が千載一遇の好機です。」

文官の言葉に確かにと思い、決めた。

「北郷の領土、漢中を攻める」

そう宣言した。

「今すぐ軍備をまとめろ。」

文官に命じた。

いや、これでは軍師に近いな。

文官は礼をして急いで出て行つた。

さあ、戦だ。

ただ奪うだけの戦と呼べるものか分からぬがこの戦で私と私の国の運命が決まる。

馬超サイド

北郷領、漢中を攻めることを決めた私はすぐさま戦の準備を始めた。先ずは誰が出陣するかを決める作業だ。

私は半分程を出して残りの將は後詰めに残そうとしたが。文官は

「いや、全ての將兵を出すべきです。」

と無茶苦茶なことを言つて来た。

「いや、流石にそれは無理だらう。」

と文官を見る

「いえ、眞面目に言つています。確かにとんでもなく無茶苦茶を言つていますがこれは考えがあつてです。」

文官は眞面目に言つのでとりあえず聞いておくとした。今回の情報や軍の用意もしてきたんだから。

「まず、何故こんな無謀な考え方だと見つと今回の作戦のためです。今回の目的は知つての通り食料の奪取です。しかし、侵略でも無いのに何故大軍を出すのかは北郷軍にあります。」

「北郷軍？」

私が聞くと

「はい、知つてゐるかと思いますが北郷軍は強いです。」

当たり前なことを言つて來たので私は少し怒った顔をして

「そんなことは知つてゐる。何せ負けたことが無いからな何故今更わかりきつたことを言つのだろうとこぶかしんでしる」「では何故負けたことが無いと思われますか？」

文官が聞いてきた。

「それは強い武将がたくさんいるからか？それとも兵士の数が多いからか？」

私が聞くと

「いいえ、北郷軍には突出した将はいません。將軍でも平均より強い位です。兵士は確かにどの軍より充実していますが決め手ではありません。」

私の答えは外れだつたらしい。では何か？

「答えは兵士の質です。」

質？と分からぬ顔をすると

「北郷軍の兵士は平均的に強いのです。

普通は將軍など高い地位にいる将は強くても兵卒など下のものは弱い」と言うのが定石です。

しかし、北郷軍はこれといった弱点が無いのです。

兵士の強さが平均より少し上な位ですが、これといった有名な將はない代わりに全体的に強いのです。

オマケに指揮官が死んでも直ぐに次点の將に指揮権は委譲するので混乱がほとんど無いのです。

このよくな軍が大軍で來るので強いのです。」

文官の意見を聞いてなる程と思った。

軍の数が多いだけならエン紹と同じだが、兵士の質が全体的に高いなら強い。

これといった弱点が無い兵士が大軍で來たら脅威としか言いようがない。

「それが何故全ての將兵を派遣することに繋がるんだ？」

北郷軍の強さは分かつたが何故全てを派遣するかを聞く。

「今回は漢中に奇襲をかけることで勝機を見出します。しかし、国境を攻めるだけとは言つても北郷軍と衝突することになります。

その時、兵糧庫を攻めるのに時間を掛けたら援軍と常駐軍に挾撃されてしまいます。

そうなればこちらの被害は計り知れません。そうならないために兵糧庫を直ぐに落とし、食料をすぐさま奪取しないといけません。

攻めて直ぐに落とし、直ぐに撤退するためにほとんどの将兵を派遣するべきです。」

と文官は考えを熱弁した。

確かに筋は通るが全ては言ひ過ぎだ。

「お前の考えは分かつた。しかし全軍は言ひ過ぎだ。」「

と文官を諫める。

「はい、私としましても全軍はたたき台として言つたままで本当に全軍とは考えていません。

現実案としては7割位の派遣がいいと思われます。」「

文官の提案は私の考えよりは多いが現実的な案だった。  
確かに文官の言ひ通り食料を得るために直ぐに落として逃げなくてはいけない。

まともに戦つて勝てるとは思えない。

援軍がくる前に全てを終わらせ無ければならない。

そのため、私は文官の提案を飲んだ。

「分かった。派遣する軍についてはお前に全面的に任せた。」「

と私は文官を信頼して任せた。

文官は礼をして派遣の準備を行つた。

そういうえばアイツの名前を知らなかつたな、この戦が終わつたら聞いてみよう。

天水を経由して漢中に着いた。

最初は長安から攻めようとしたが文官に

「長安は洛陽に近いから挾撃の恐れがあります。森に囲まれ狭いですが天水の国境からのほうが安全です。」「

と言わされたので天水を選んだ。

本当に役に立つ奴だ。

軍も主力を揃えたらしく、規律が保たれているから進軍が早い。これなら奇襲に気付かれる前に攻められるだろう。

今回の戦が成功したら軍師に格上げしよう。

文官のことを考えていると先頭部隊が国境線が見えたらしい。何やら慌てている。

「大変です馬超様！北郷軍の規模が予想より大きいです！」

物見が告げて来た。

どうやら予想より国境に軍を当てているらしい。

大軍を持つて来て良かつた。これもアイツのおかげだな。と少し動搖したが直ぐに立て直した。

「聞け――――馬国の戦士達よ――――予想より敵の規模が大きかつた！――だからどうした！――アイツらより我等の方が遙かに多い――――」

「あの程度、何ら障害にならない――――  
何故なら我等騎馬軍団は大陸最強だ――――あんな皆踏み潰せ――――  
と突撃前に兵士達の士気を上げる。

「我等は最早引けん！――帰つても食料が無い――だからアイツら  
肥太った豚共から食料を奪い取つてやれ！――  
行くぞ馬国の戦士達よ！――アイツ等を踏み潰してやれ！――  
演説が終わると

「オオ――――――――――！」

と頼もしい声が帰ってきた。

そのまま先頭部隊が突っ込んで行つた。

他の部隊も後に続く。

私は中間部分から突撃した。

要塞に真っ直ぐ突っ込んでいたら突然

ダーダーン――――

とまるで地響きのような音が要塞から聞こえた。

その瞬間先頭部隊が次々と吹っ飛んだ。

その光景で兵士達は驚き、とんでもなく大きい音で軍馬は暴れてい  
る。

その恐慌状態を鎮めようとしていたらまた

ダーダーン――――

という音が聞こえた。

そしてまた先頭にいた兵士達が吹っ飛んだ。

何か分からず、このままでは全滅しそうなので一旦引ひと指示を  
出したら今度は

ダーダーン――――

と後ろから聞こえた。

後方にいた兵士達は前に向かって吹っ飛んで来た。

どうやら挟まれたらしい。

どうしようか悩んでいると一部の兵士達が周りの森に逃げ込もうと  
していた。

「貴様等――何処へ行く――? 敵前逃亡は重罪だぞ――――」

と叫んでも止まらず森に行ひとす。

このままでは潰走してしまひ。

そう思つたら

ダーダーン――とこうわしきよりは小さいが大きな音が聞こえた。

その音が聞こえたら逃げようとした兵士達が倒れ込んだ。

どうやら死んだらしい。

囲まれたことが分かつた軍勢は絶望したように志氣は見る見る下

に下がつていった。

このままではいけないと叫ぶ。

「馬国の戦士達よ！！！最早前に進むしかない！！！」

例え何が起きようと進め！！味方の屍を越えて前進せよ！！！そつすれば勝利が見える！！！」

と最後の命令をする。

その命令を聞いた軍勢は志氣を取り戻し、要塞に突っ込んだ。

途中

ダーダーン！…やダーダーン！…といつ大きい音や、ヒュン…ヒュン…と矢が雨のように降つて来た。

それによつて多くの兵士達が死んでいくがそれでも突撃は止まらない。

全員がただ前に進もうとしている。

あと少しだ！！と思つたらいきなり先頭が止まつた。

何だ？と思つたらそこにはトゲが付いた鉄の繩があつた。

先頭がその繩を切ろうと奮闘していると『やまた大きな音が聞こえ、死んだ。

それでも何とか進もうと剣や槍で鉄の繩を切ろうと奮闘する。また多くの音が聞こえて兵士達が繩にもたれかかつて死んだ。

私はそのもたれかかつた兵士の死体に乗つて鉄の繩を越えた。遂に敵の兵士の顔が見える距離まで近づいた。

よく見ると何かよく分からぬ鉄の筒を構えた兵士の後ろに偉そつな鎧を着た男がいた。

北郷だ！！

と何故か分からぬが確信が持てた私は北郷に向かつて走る。あと少し、と思つたら突然。

地面が沈んだ。

落とし穴と氣付いた時には何かが私を貫いていた。

何かと見たら槍が私の腹や胸など全身を貫いていた。

刺さった部分が物凄い暑くなってきた。

コレはダメだ。と直ぐに分かった。

多分毒が塗られているのだろう。

何となく分かる。

意識が朦朧としてきたら上から土が降つてくる。

ああ、埋める気だ。

自分のことなのに何故か他人ごとに思えてくる。

今までの人生が走馬灯のように巡り、文官の顔が出てきた。

「ああ、アイツの名前、聞きそびれたなあ……。」

それが馬超の最後の言葉だった。

## 文官サイド

よし、俺の任務はこれで終わつたも同然だ。

長かった。

この1年。

本国から遠く離れたこの田舎で戦以外口クに使えない主に仕えてせつせと働き続けた。

北郷様から長く御命令が無いから忘れ去られたかと思つたがようやく指令が来た。

馬超の信頼は獲得しているけど兵士の派遣数を提案できる程では無いからどうしようか悩んだけど、北郷様からの情報で軍師や他の文官達に先手を取れた。

後は簡単だった。

一番早く情報を伝えたおかげで一時的に筆頭軍師のような地位を手に入れた。

その地位で命令が簡単に出来たし、権限も大きくなつた。

それにさつきまでやつてた会議においても俺の意見は全面的に通つただけでは無く、俺が軍編成を決めていいとのことだ。

それでは御命令通り勝手にやらせていただきましょ。

北郷様の指令の「主な将兵はできる限り派遣させり」との命令に従つて有名な武将や精兵を派遣させよ。

残り力スや不真面目な将兵を国に残しておひづ。

そうすれば後々の侵略が楽になる。

それに、このまま食料不足の状態で冬を迎えるのだ。

もしかしたら残り力スの軍隊が略奪を行うかも知れない。

そうなれば尚帝国の有利となる。

さあてそれでは逃げますか。

俺は仕事が全部終わつてから部下に

「私はこの後農家の被害を視察してくる。もしかしたら何日か掛かるかも知れないのでその間は頼むぞ。」

そう伝えて城を出た。

既に準備しといた荷物を持つて馬で北郷帝国旧王都洛陽に急いで向かう。

洛陽に着くまでひたすら走り続けた。

途中馬を交換してひたすら走つた。

ようやく洛陽に着いた俺は上司に帰還したと伝えた。  
やつと安心して寝れる。

馬国では常に緊張状態だったから熟睡出来なかつた。

翌日、熟睡した脣頃に北郷様から首都新野へ召還命令が来た。  
いきなり北郷様からの呼び出しで驚いた。

報奨かそれともまさか何か失敗したか?  
とビクビクしながら新野を訪れた。

城を訪れてビックリした。

まさか北郷様に直々に謁見するとは思いもしなかつたからだ。  
てっきり上司に合うだけと思つてた。

城の奥に案内されて跪いたまま待つた。

程なくして一人の男と護衛が入つて來た。

男が玉座に座る所をみるとその男が北郷様らしい。  
未だに俺は跪いたままなので顔は分からぬ。

そこに

「面を上げる」

と聞こえたので顔を上げた。

最初の印象は何処にでも居そうな平凡な顔だった。  
この超大国の王にしては普通に見えた。

まあまあ良い服を着ているが別に着飾つていなし宝石などの装飾品も付けてなかつた。

あまりの意外さに呆けていると北郷様が

「不思議か？あんまりにも普通に見えて？」

とお聞きして來た。

俺は直ぐに

「いいえ、むしろ納得しました。」

と答え、頭を下げる。

北郷様は興味深そうに

「ほう、何故だ？」

とお聞きになるので

「はい、やたらめつたら装飾品で着飾るものは自分に自信が無いからです。

自信が無いから着飾り威儀を持たせます。

しかし北郷様にはそれがあれません。そのことから確固とした自信があるのだとお見受けしました。」

俺は正直に答えた。

何か偉そうなことを言つが、実際は足が震えそうで我慢している。

どうやら俺の意見をお気に召したのか

「そうか」

と言い北郷様は頷いた。

俺はホツとしていたその時また北郷様は

「今回お前を呼んだ理由はお前の活躍によつて我が軍は大勝利を得られた。

よつてお前を俺直々に讃めたくて呼んだ。」  
とのありがたいお言葉だつた。

「ありがたき幸せにござります。我が軍の大勝利に貢献できて恐悦  
至極に存じます。」

と答えた。

「お前には今回の経験を訓練中の忍に教えるために講師になつて欲  
しい。」

とのありがたいお言葉だつた。

やつたぜ昇進！

これで同期の出世頭だ。

「喜んでお受け致します。」

とまた頭を下げる。

「それと、今回の潜入工作と勝利に貢献した賞」として今まで潜入  
していた一年分の給料と現在の給料を倍にして、そして家を『』える。  
物凄い褒美だ！

一年頑張った甲斐があつた。

家はもう無くなつていたからどうしようかと思つてたんだよね。

「重ね重ね、誠にありがとうございます。」

また深々と頭を下げる。

「それでは話は終わりだ。今後も働きに期待している。」

北郷様はそうおっしゃられ部屋を出て行つた。

ふーー。

ようやく全部終わつた。

長かつた潜入工作とその報告、そして褒美。

これでやつとハメを外せる。

さあて、貰つた金で娼婦でも買つか。

馬鹿じやあ仕事人間を装つたために女を抱けなかつたからなあ。

それにして今に思えば馬鹿って結構良い女だったな。  
ま、今頃は土の中で腐っているか？

ま、いいや。  
元上司のことなんて。

今日はグロいです。

冬を迎えた馬国は地獄と化した。

食料不足は深刻化して餓死者が大量に出た。まるで第一次大戦下の餓島のように。

食べられるものは何でも食べた。

しかし残酷な事に季節は冬。

夏なら虫や植物があるが、冬はほとんどの虫は死に、植物は枯れている。

食べられるものはほとんど無い。

僅かに残った備蓄は奪い合いで秋の終わりに無くなつた。

何とか食べられるものを探すが、食べられそうなものは常緑樹の葉っぱか木の皮ぐらいだ。

冬眠中のカエルや蛇を掘り起こして食べたりもした。時には冬眠中のクマも襲つた。

しかし、冬眠中の生き物は栄養を取つて無いから大した栄養にはならなかつた。

追い詰められ人々は遂に、最終手段を取つた。  
共食いだ。

食人を始めたその光景は正に地獄。

まず食べられたのは働けない赤ん坊や子供だった。

親は泣きながら我が子を食らつた。

このような光景が馬国全域に見られるようになつた。

残つた軍や民衆が何度も俺の国に散発的に侵略をして来たが、こと

ごとく失敗して全員死んだ。

馬超や有能な武将が死んだ軍隊はもはや統率力が無く、次々に俺の国に逃げて来る。

俺の国はこういった亡命者も喜んで受け入れる。

しかし、軍隊経験者は強制的に軍に入れられる。

その際、訓練途中に余程軍に向かない精神力や体力が無い者は農業従事者にする。

この事実を知った馬国の軍人や農家、商人、町人、村人が次々と亡命してきた。

馬国は最早空っぽだ。

冬が終わればモンゴルから直ぐに侵略されるだろう。

その前に俺が取らなくては。

真冬に入る少し前に馬国に侵略した。

大義名分は民衆の救出や現政権を打倒だつた。

馬国の軍人はほとんどがうちに来たので地理に困らないし、敵がほぼいない。

いたとしても腹が減つてまともに動けていない。

侵略して間も無く。無血開城に近い状態で首都武威を落とした。

街には死体が溢れて俺から見ても悲惨としか言いような光景だった。しかし、罪悪感は無い。

こうすることで我が軍に戦死者は出なかつたのだから。

唯一の死者は準備不足の凍死だつた。

それも極少数だつたから誤差の範囲内だ。

馬国を占領した俺は馬国からの亡命者を旧馬国に戻した。やはり元々いた地元の人間ならば生活に支障が無いからだ。

それから旧馬国は急速に発展を続けた。

モンゴルとの国境なので軍を大量に増員して防備を固めた。国境線には要塞を建造して侵略を防ぐ。

そしてモンゴルとの貿易を始めた。

正確にはこの時代にモンゴル帝国は存在しない。

なので国境に近い何度も衝突している部族と交渉した。

何度も使者を送り出し、献上品も送った。

時には献上品だけ取られて使者が殺されたことがあった。

そのため、ナメられないために軍を率いて交渉というか脅しに行つた。

こちらの誠意が伝わったのか、不可侵条約の締結や貿易が始まった。と言つてもモンゴル側は狩猟民族なので物々交換での貿易になつたが、戦いあつてた以前よりは遙かにマシだろつ。

今は物々交換でいい。

そのうちにモンゴル全域で通貨を発達させ、商会を広めて市場を支配してやる。

次に旧馬国の発展だ。

まずは国民に食べ物を配給して安心させる。

農場を作りたいが、冬なので雪解けを待たなくてはならない。

今は経済と軍事の発展を急いだ。

経済は今まで通り北郷商会の店を全域に広め、販売網を拡大した。そして公共事業で雇用を増大させて浮浪者を無くす。

川が凍つているので治水は無理だつたが春から直ぐに始められるよう備える。

次は軍事だ。

遂に出来た三本マストのガレオン船。

これでヨーロッパにも行ける。行つて何をするのかは分からぬが。

次に銃にライフリングを刻む実験を行つたが難しかつた。

蒸氣機関も無い時代に細い鉄の管に刻むのはほとんど無理だつた。

職人達に何とか一つでもいいから作るよう指示した。

一つあれば俺のコピーで何とでもなる。

後は現在使つている丸い鉄の玉をドングリ状にして、紙薬夾が出来ればミニエー銃が出来る。

そうすれば装弾時間は飛躍的に短くなる。

そして、いちいち弾を銃口から詰める先込め式から、後装式に変えられる。

そうなれば槍や剣の時代はほぼ終わる。

弓は微妙にまだ使えそうだけどね。

出来るなら無煙火薬を作りたいが、二トロセルロースの精製法何かわからぬえよ。

大学や防衛大学に開発は命じたけど望み薄だらうな。  
もしかしたら奇跡が起きるかも知れないので気長に待とう。

さあてと、そろそろ三国志も終盤だ。

と言つても最早残つてゐるのは死にかけの劉備だけだが。

残る厄介なのはエン紹、劉備、孟獲位か？

劉備はまだ準備不足だから延期にして、孟獲が未だに攻めて来ない

とは意外だ。

あのガキのことだ、条約のこと何か忘れて直ぐに突っ込んで来ると  
思つたのになあ。

まあ、でももう直ぐかな？

まあ、次は一番強いであろうHン紹にするか。  
マトモに攻める気は無いけどね。

俺は多分、これまで一番大きく強い敵だらうエン紹をそろそろ攻めることにする。

エン紹が劉備を潰してからにしようと思つて待つてたら、劉備よりも俺を狙つているとの忍からの情報が入つて来た。  
殺られる前に殺る、主義な俺はエン紹に先制攻撃を仕掛けることにした。

エン紹を攻める口実何か幾らでもある。

未だに食料難で税率は高い。

民衆の不満は破れそうなほど高まつている。

前回の工作は破れる前に空気を抜いたが今度は破れても空気を入れてやる。

早速俺は忍に流言飛語を流させた。

内容は「エン紹がまた税率を上げる」だつた。

これは嘘では無い。

俺との決戦のために物資を蓄えるといつぱりだつた。實際はエン紹の気まぐれだが。

しかし、民衆はそんなことは知らないのでウワサが本当だつたと思った。

そして次に、エン紹の兵士達がまた以前のように暴行や略奪をしている。  
とのウワサを流した。

エン紹軍の兵士達に賄賂を渡し地方都市を襲わせた。

本当は首都を襲わせたかったが流石にそれはやつてくれなかつた。まあ、エン紹に直ぐバレるからな。

民衆はまたウワサが現実になつたことからウワサを信じ始めた。

そして次は、エン紹軍が農作物を焼き始めているといつウワサを流した。

忍にエン紹軍の兵士に化けさせ、戯れに見せかけて農家の前で畠を焼いた。

流石にこの行動はエン紹側にもバレる可能性があるので焼いたら直ぐに撤退。

このよひに、ウワサが本當になるように様々な工作をしたため、民衆はウワサを予言のように受け止め始めた。

そこで今度は俺が動く。

エン紹に食料の援助を申し出た。

内容は

「無能なエン紹の治世で苦しんでいる民衆が不憫だから援助してやろうか？」

という感じの、ものすごい上から目線な手紙を送つた。

勿論、誇り高いエン紹はこの申し出を拒否。

それどころか烈火の如く怒り、文句の手紙さえ送つてきた。  
そこでもう一度ウワサを流す。

北郷帝国が食料援助を申し出たのに、エン紹は誇りのために拒否した。という事実だ。

勿論、俺側の不利になることは流さず、エン紹が悪いということだけを流した。

民衆はことの真相を各役所に問い合わせた。

役所側も嘘では無いから否定できない。そのため、今回もウワサは

本当と広まつた。

後はいつも通り北郷教に入信したもの達に反乱を扇動させる。最初は、やはり反乱なんか成功しないと人々は積極的に参加しなかつた。

しかし、ここで新たなウワサが流れる。

近いうちにエン紹は北郷帝国に攻め入る。

ということだつた。

これには民衆はたまたもんじや無い。

ただでさえ貧弱なエン紹国が今では超大国になつた北郷帝国に勝てる訳が無いのは子供でも分かる。

それに、戦争になれば男達が持つていかれて死んでしまう。

北郷帝国は味方には優しいが敵にはとことん厳しいことは有名だ。必ず殺される。

そんな状況になつたせいで反乱者の数は激増した。首都から遠い地域では県 자체が反乱勢力になつた。

中には北郷帝国に独断で降る判断をした県もあつた。

何の苦労無く北海を手に入れたことで海から攻めることも可能になつた。

さて、エン紹はどう動く？

もう既に王手の状態だけね。

## エン紹サイド

エン紹の治世は全く上手くいっていなかつた。反董卓連合からは悪いことばかりだつた。

まず、塩害騒ぎで慢性的な食料難になり、未だに解決していない。そこに北郷国から援助の申し出があつた。あの情けない男の癖になかなか気が利く。と思っていたが、援助では無く売つてもいい。とのことだつた。ふざけるなどという思いだつた。

なんで高貴な私が成り上がりの、物売り如きに金を払わなければいけない！

と憤慨して北郷に直談判に行つた。直に合えばあの男はビビつて無料、できないなら格安で売らせるつもりだつた。

北郷国は自領に比べて遙かに裕福できらびやかだつた。まるで自分の理想を見ていいようだつた。なるほど、確かに北郷は有能らしいが、驕り高ぶつてはいけない。所詮下餓な男。

高貴な私に逆らひことは許さない。という思いだつた。北郷の城に着き、程なくして北郷と会見した。私は、北郷に無料食料援助を命じようとしたら北郷は色々な珍しい物やきらびやかな物で私は目を奪われた。その隙に、北郷は斗詩さんと色々話していた。

斗詩さんは色々責めたが、結局は言い負かされて帰国することにな

つた。

結局、北郷からは食料の単価が高すぎて、沢山買える余裕がないらしい

だから、北郷以外の国に援助を求めたがどこの国も「そんな余裕はない無い」という回答ばかりだった。

「皆さん揃つて何で薄情な人達ですことー！」

エン紹は叫ぶ。

「まあまあ姫様落ち着いて」

顔良がなだめる。

「だいたい斗詩さん！アナタが北郷さんに言い負かされたせいでしょう！」

顔良に責任を押し付けるエン紹

「いやあ、まあそうですけど、あれは仕方ないですよ。正論しか言ってないし。」

顔良が言い訳する。

「まあまあ。姫様。今更仕方ないじゃないか。姫様だつて北郷の贈り物で目を奪われたし」

文醜が宥めているのか煽つてあるのか分からぬことを言つ。

「猪々子さんうるさいですわよ！アナタこそ北郷の出したお菓子を食べてばっかりだつたではないですかー！」

エン紹がますますヒートアップする。

「まあとりあえず今は北郷から買うしか無いですよ姫様。他の国もタダじゃくれないですよ。」

顔良はやれやれという顔をする。

「そこを何とかするのがアナタの仕事でしょーーー！」

と顔良を怒鳴る。

結局は北郷から高い食料を買つハメになつた。

そのせいで国庫はほぼ空になつた。

当然、エン紹は以前の生活を維持するために税を上げる。そのせいで国民の不満が高まつた。

さらに、命じた覚えが無いのに兵士達が国民に対して暴行、強姦、殺人など様々なことをしてゐるらしい。

国民は私を糾弾する。

「猪々子さん、斗詩わんー」ればゞりこりとですの?!

エン紹は怒鳴る。

「まさか私に無断で兵士達に命じたんですの?」

エン紹は疑わしく見る。

「とんでもありません! 例え姫様の命令を無視してもこんな命令は出しません!」

顔良は無罪を訴える。

「そりだぜ姫様。私達がそんなことをする訳無いだろー」「文醜も訴える。

長い付き合いのエン紹はそれが嘘では無いことが分かつた。

「ではどうしてこんなことが起こつたんですか?」

エン紹は聞く。

誰もが分からなりらしく首を振るだけ。

国民の不満は遂に爆発して反乱が起きた。

各地で反乱勢力が軍を襲つ。

軍も反撃するが動きが鈍い。なぜかと言うと兵士達の間で怪しい薬が流行つてゐるらしくそのせいで兵士達は真面目に働くかない。

それに、一度は反乱勢力を退けても、何故か次は様々な武器を持つて攻めてきた。

今まででは武器の差で勝利できていたが、その差が無くなると膠着状態が続いた。

それでも何とか反乱勢力を撃破して、反乱は収まつたが治安は最低となつた。

今回の反乱首脳陣は全員死罪にしたがまだ反乱熱は冷めてない。どうやら反乱を起こせばそれなりに被害を出せることが分かつたらしく今までのように従順では無くなつた。

さらに悪いことは続く。

塩害は收まらず、翌年も作物は収穫出来なかつた。

それでまた北郷に泣きつくハメになりまた税を上げる。また小さな反乱が起きたが今回は直ぐに鎮圧できた。

不名誉だが一回目だけあつて慣れていった。

このままでは北郷から搾り上げられると感じた工ン紹は塩害になつていらない公孫贊の国を占領した。

軍隊が疲弊していたが何とか辛勝した。

公孫贊は処刑して工ン紹の国になつた。

やつと食料の田処がついた。と思つたら今度は馬国でイナゴが発生した。

対岸の火事と思っていたら瞬く間に大発生し、一いちにもやつてきた。

幸いにも被害があつたのは塩害にあつた畠でそれほどの被害は無かつたが全く無い訳ではない。

かろうじて再生し始めていた畠は壊滅してまたダメになつた。何か天から見放されたように災害が起き続ける。

このままでは自然に滅んでしまうと焦り、工ン紹は一発逆転を試みる。

今では帝国宣言をした北郷帝国を占領する計画を立てた。

あの記憶に残るさりびやかな街を占領したら私の名譽も復活するだ  
うかと思ひ決断する。

しかし顔良はその計画を否定する。

「無理です。今の我が軍の疲弊具合から言つて常勝無敗の北郷帝国  
には勝てません。」

顔良は熱弁する。

それほどまでに北郷帝国は強かつたのだ。

しかしエン紹は

「やつて見ないと分かりません！もしかしたら勝てるかもしねい  
でしょ。」

と何故か自信あり気なエン紹。

「そうだぜ斗詩！やらないうちに負けを認めたら勝てる戦も勝てな  
いぜ！」

文醜もやる氣だ。

顔良は北郷帝国の軍事力、国力を長年研究していたから分かる。  
例え北郷軍が真っ正面から攻めて来ても勝てないことを。  
しかし、いくらそのことをエン紹に言つても無駄だろつ。  
この人は決してその事実を受け入れない。

しかし支えることを誓つたのだから見捨てるとは出来ない。  
だから、戦つて勝てないまでも被害が少ない策を考える。

「戦うとなると兵力差や武器の質の差をどう埋めるかですね。  
どう埋めるかを考える顔良

「そんなことは簡単ですわ！」

エン紹が言つ。大体想像が着くが一応

「何ですか？」

聞いておく。

エン紹が自信満々に

「華麗に美しく戦つのですわー。」

馬鹿を言つ。

顔良は無視して

「現実となると陸では無理ですね」と言つ。

エン紹が何か言つているが無視。

流石に文醜も同じく無視して考える。

どうしようか考へてみるとまたエン紹が

「思つきましたわー。」

と喜声を上げる。

今度は何だ?と面倒そうに顔を向ける。

そんなことに気づかないエン紹は自信満々に  
「海戦をすればいいのですわー。」

叫ぶ。

確かに、一見悪くは無い。

一応はこっちにも海軍は存在する。

あつちにも巨大なのがあるが……。

陸ほどは強く無いだろうが、劉表との戦いで見事に勝利した。

最も劉表軍はなぜか伝染病にかかり船が沈んだりして海戦とは呼べなかつたらしいが。

「確かに陸戦よりは勝機はありますけど……」

その後どうするんですか?と続けようと思つた

「よし、決まりですわ!それでは対北郷戦は海戦で、こうじてどう!

決まつてしまつた。

奇跡が起きて海戦に勝つても結局は陸戦になるんだからそれをどうするかを全く決めて無い。

流石に異議を唱えようとしたら

「分かった!海戦だな!楽しみだなあ……。」

と文醜が言ったことで決まりてしまった。

さうかんのよ…………。

エン紹は海戦がお望みらしい。

確かに、少し前までは海軍は陸軍に比べると攻撃力に欠けていたが今では違う。

大砲が出来たことで対艦攻撃能力は飛躍的に上がった。

この時代の海戦は敵の船に乗り付けて敵船に乗り込み戦うのが主だつた。

しかし、俺の軍は乗り込まずに接近したら砲弾を撃ち込んで相手を沈める。

この時代の船底は平らだから砲弾を打ち込まれれば直ぐに浸水する。一方、こっちは竜骨に沿つて作ったガレオン船だ。安定性が違う。それに砲数がすごい。

巡洋艦クラスでさえ三本マストの巨艦で片舷二十以上の砲座を持つ。全面にも三本の砲座を持っている。

戦艦クラスは四本マストで鉄の装甲が重要部に散りばめられている。出来るなら全面に装甲を付けたかったがそれでは重すぎる。エンジンが無い船では口クに進まねえ。蒸気機関が出来るまではお預けだ。

砲座は片舷三十以上あり、前面には五、後方には三ある。

駆逐艦クラスは一本マストのスピード重視だ。

主に偵察や威力偵察用だ。

魚雷が無いから攻撃力に欠けるが、接近攻撃用にホウロク弾を積んでいる。

ちなみに砲座は十以上だ。

着発真管が出来れば攻撃力は大幅に上がるが技術力の問題でまだ出

来ない。

蒸気機関も開発を続けているからいすれ出来るだらう。

さて、エン紹との海戦だが河から攻めて旧王都洛陽を攻めるらしい。  
かつてエン紹に食料売却の交渉の際に使った街だ。  
どうやら洛陽のきりびやかさが日に残つたらしく、欲しいくなつた  
らしい。

なげなしの海軍を全艦船を出して攻めた後は上陸して洛陽を占領す  
るという作戦らしい。

例え海戦に勝っても陸戦に勝てると思つてゐるのか？

思つてゐるんだろうな。

あの無能のことだ。

どうせ海戦しか考えていないんだらう。

オマケに総大将自身が海戦に参加するらしい。信じられん。  
船なんて事故で沈むことさえあるのに海戦に総大将自身が参加する  
なんてあり得ない。  
いや、この時代ならあり得るか？

日本では指揮官先頭の誓とかがあつたし、中国でもあつたのか？  
ま、いいや、あの馬鹿が出るつてことは頗良や文醜も出るだらう。  
この海戦で一緒に沈めてやるう。  
今回は工作はしない。

今後海戦でナメられないようにするためには。

一回ここで切ります。

次話はエン紹サイドです。

## エン紹サイド

北郷帝国の洛陽を攻めるために海戦を決定した私はすぐさま海軍の準備をした。

北郷さんの海軍は負け無しだけど実力で勝つたことは無いはず。相手の国が何時も何らかの不運に見舞われ実力が發揮出来なかつたのだから。

偶然つて怖いですね。

何か斗詩さんは仕組まれたのかもしれない。とか言つけど考え方過ぎですわよね。

まあ、とりあえず北郷さんの洛陽を取れば私の名声も戻るでしょうし、あのきりびやかな洛陽も私の中にならぬのですし。  
べ、別に昔行つた洛陽が羨ましかつたわけではありませんの」とよ。とにかく！ 洛陽を手に入れることが先決ですわ。

そのために！ 私が直接旗艦に乗つて洛陽に一番乗りですわ！

そのほうが何か優雅に見えそうですし、それなのに斗詩さんつたら

「危険過ぎます！ 姫様が直々に海戦に参加する必要はありません！」  
つて反対しますのよ！

「どうしてですの！ 総大将である私自身が行つたほうが兵達の士気  
だつて上がるでしょー！」

斗詩さんに言ひ。

「そ、それはそなんですが……」

斗詩さんが困つたように言ひ。

「ならばよろしいではないですか？！」これは決定ですわ！

斗詩さんにハツキリと言ひ黙らせた。

全く！ 何だと呟つのですの斗詩さんは！ 私が出ないと何も始まらないではないのですの！

### 顔良サイド

はあ……最悪だ。

北郷が何か船に工作して来ないか注意と見回り。

そしてその報告で疲れてるのに姫様が海戦に参加する何て馬鹿なことを言うんだからもうヤダ。

何もかも投げ出して放浪の旅でもしたい…。

姫様には何度も北郷は先の海戦は工作で勝ったと言つが信じられない。

まあ、確かに船の不思議な事故とかは信じても伝染病とか信じられない。

私でもたまに本当に偶然だったのでは？ と思いたくなる。

しかし偶然にしては北郷に都合が良すぎる。

もしも北郷が何もしていなら誰も勝てる訳無い。

それでは神が味方しているのと同じだ。

もし本当にそうなら絶望的だがそうでは無いハズだ。

いや、そう思わなければやつていけない。

それだと呟つのに姫様は北郷を侮つて勝てると言じきつていい。ある意味羨ましい。

出来るなら私もそう思いたいけど理性がそれを否定する。

オマケに猪々子つたら絶望的だと分かつているのに姫様に賛同するんだから！

そりやあ姫様は一度言い出したら聞かないといつのは分かるけど海戦にまで賛同しなくてもいいじゃない！

確かに私達が守ればいいけど万が一にも北郷が何か凄い兵器でも出

してたら姫様が死ぬかも知れないじゃない！

はあ……もうヤダ……。

この戦いが成功に終わつたら休暇でも取ろう。

そのためにはどうか、どうか何もありませんよ。」

3.1 (前書き)

今回主人公ちょっととウザいです。

遂に本格的な海戦が始まる。

この歴史上、初めてだらう火力による海戦。  
多分ワンサイドゲームで終わるだらう。

しかし、勝利条件がある。

先ずは敵艦船の殲滅。

敵大将エン紹と首脳陣の抹殺。

こちら側の損失皆無。

これぐらい出来なくては勝利とは言えない。

わざわざ大砲を開発してアウトレンジ攻撃をするのに被害なんか出  
してられるか。

被害は精々出しても中破まで。

駆逐艦はその性質上、接近攻撃が多いから乗組員に被害がでるかも  
知れないが、船が沈むことは無いだらう。

というか、接近できたら炮烙弾や火炎ビンを投げ込んで火事を起こ  
してやる。

さあて、そろそろ会敵だ。

駆逐艦はエン紹艦隊の後ろに周りこんで逃げ場を断ち、先頭はノロ  
イ戦艦が固める。

横はそこそこ早い巡洋艦が待ち伏せして敵が逃げてきたら撃破。  
旗艦「北郷」には俺、北郷一刀が乗っている。

俺もこんな所に来たくなかったんだが、指揮系統の都合上俺が来た  
方が早いので俺も参加した。  
すげえ怖いが多分大丈夫だ。

この「北郷」は旗艦だけあって防御力は艦隊の中で一番高い。

攻撃力はそこまで高く無いのは基本攻撃は護衛艦がやるからだ。

それに、砲座はいざという時のためにオールを出してガレー船のように風と漕ぐ力で逃げる。

そのため、戦闘員には漕ぐためだけの要員も乗っている。

まあ、そんな状況になつたら終わりだけね。

さて、始めるか。

エン紹も頑張ったもんだ。

財政難なのに五十隻以上の艦隊を寄越すとは。

まあ、中には頑張って修理したんだろう、オンボロと言つて相応しい船から漁船まで出して来やがつた。

漁船で何をする気だ？

まさか突っ込む気か？

言つちやあ悪いが、うちの船は全部が大型・中型ガレオン船だぞ？

あんなちつこい漁船じゃビクともしない。

ちなみに鉄甲船も参加している。

戦艦隊と同様ノロいから先頭に配備されている。突撃させれば強いだろう。

さて、エン紹艦隊が猛スピード？で突っ込んで来るからそろそろ北郷レストランを開店するしよう。

本日のメニューはエン紹の海戦砲弾風味だ。是非とも堪能していたこう。

まず、開店に待ちきれなかつたお客様には戦艦隊の一斉射を振る舞つた。

とても喜んでいたたげたのかお客様は船の上で大はしゃぎだ。

そのお客様は満腹になつたのか動きが鈍くなつたので、後続艦から追突されてしまった。

俺は後続のお客様にも満足いたたげたるよつに混乱状態の所にまた戦艦隊の一斉射を振る舞う。

今回は特別に巡洋艦隊の一斉射もサービスだ。

今度は満足いたたげたのか、前方にいたお客様は満腹になり沈みながら眠つてしまつた。

後方にいたお客様が待つのに疲れたのか帰ろうとしてしまつた。

これはいけない。

今日は肌寒いので待ちきれず帰られるらしい。

ここでお客様に帰られたら店の評判はがた落ちなので、後方のお客様には駆逐艦隊の火炎ビンによる暖房サービスを行い引き止めた。そうしたらお客様もお喜びになつたのかファイヤーダンスを踊り出した。

とても情熱的で周りのお客様も踊り出す。

何か歌を歌つてゐるのか、大声が聞こえて来るが遠いのか悲鳴にしか聞こえない。

多分、暖かいのが嬉しくて大合唱をしているのだろう。

暖房サービスが受けられなかつたお客様には駆逐艦隊による砲弾のサラダをお配りした。

おや、何やら大きな船がいました。

何か叫んでるので近づいてみましよう。

戦艦隊が前からじりじりとお客様に近づく。

生憎戦艦隊は大きすぎて動きが遅いのでまるで獲物を追い詰めるような動きになつてしましました。

それがお客様には不快だったのか真つ直ぐ突っ込んで来ました。ああどうしましよう。

お客様は大変立腹なさつているのか顔が真つ赤です。まるで命の最

後の灯火のよう。

お腹が空いて怒っているのだらうと思い、俺は至近距離での戦艦隊の一斉射をフルコースで出した。

もちろんケチること無く巡洋艦隊や駆逐艦隊も一緒にフルコースだ。この日のための訓練のせいか、全艦ほぼ一斉射といつ素晴らしいフルコースが出来た。

お客様は喜んでくださったらしくお怒りを抑え、眠ってしまった。大声で叫んでいた何やら身分が高そうなお客様は砲弾を直接食べてしまわれた。

そこまでお腹が空いていたとは思わず、待たせてしまい悪いことをしてしまった。

でも、これで満足していたたげたたと思います。

そろそろ閉店の時間ですが、まだ泳いで来るお客様がいたので軽めの銃弾をサービスしておいた。

皆さん満足したのか沈んでいった。

またのご来店をお待ちしております。

## エン紹サイド

北郷帝国洛陽を占領するために河から攻める。北郷の船を蹴散らし洛陽に上陸して占領する。まさに完璧な計画ですわ！

自分自身の知略が恐ろしい位ですわ！

斗詩さんが何故かうるさいですけど、これほど完璧な計画は私以外には思いつけないハズですわ。

それに、私の海軍の勇壮さ！

見なさいこの数！

河を埋め尽くさんとばかりの船の数を！

これだけの戦力で勝てないハズはありませんわ！

ふふふ、待つてなさい北郷さん。

たかだか物売りのアナタが私に逆らうことなどが間違っていると思い知らせてあげますわ！！

顔良サイド

じつじよひ。

本当に始まるよ。

結局北郷は船に工作はしてこないから警備が無駄になっちゃう。

私の睡眠を返せ！

毎日毎日いつ来るか分からぬ北郷の破壊工作を警戒して、たまに私自身で警備を行っていたのに何も来ない！

劉表の時は絶対やつてたくせに何でうちには来ないのよ！

何？余裕？私達なんて工作する必要も無いとでも？

あ～～～ダメだ！

寝不足で冷静な判断が出来ない。

とりあえず落ち着け私。

状況を確認するんだ。

まず、私達はこれから北郷の艦隊とやつ合つて勝てたら洛陽に上陸し、占領。

負けたら即座に撤退。

これについては姫様が何か言つても問答無用で連れ帰る。

海戦での負けは即死に繋がる。

陸とは違つて落ち延びることが困難だ。

陸ならただ見つからずに逃げればいいけど海では逃げるのには船が必要だ。

泳いでも逃げれるけど距離が稼げないから直ぐに捕まる。

そうなつたら終わりだ。

あの北郷のことだ。必ず姫様は勿論、私達も皆殺しにするだらつ。

私が今後のことを考えていると姫様は自分の世界で悦に漫つたいる。

本当。こんな状況でも自分優位に考えられる性格は羨ましい。

何か「私の艦隊の勇壮さを見る」とか言つてこいるけど、お世辞にも艦隊とは言い難い。

財政難から整備されずにほつたらかしにしてたせいで、久しぶりに水に浮かべたら浸水する船が多くつた。

出発直前まで修理していた船が多かつたのでほとんどの船は木で継ぎ接ぎのオンボロばかりだ。オマケに船数を増やすために船を徴発しまくつたせいか漁船までいる始末。

確かに「何でもいいから船を調達しろ」と命令したけど漁船で何が

出来る？

せいぜい体当たりか火矢を打ち込むぐらいか。  
小回りは効くから偵察や味方の誘導には役に立つか。

まあ、もう出航したんだから仕方無いか。  
やれるだけやろう。

これに勝てばもしかして風向きが変わるかも知れないのだから。

### エン紹サイド

な、何ですのあの艦隊は？

見たこともない形のとても大きな船は？

その船が片舷を見せて横にずらりと並んで整列するかのような布陣  
は？

いつたい何なんですか？

理解が出来ずに呆然とするエン紹。

目の前には自分達より遙かに大きい見たことがない船が何故か片舷  
を見せて並んでいる。

この時代の人間では理解が出来ないだろう。

現に、エン紹以外の兵士達や將軍達も理解出来ずに呆然としている。

そのショック状態からいち早く解放されたのがエン紹だった。

彼女は「とりあえず敵だから倒そう」という単純だが正しい判断を  
下した。

「皆さん！！呆けている場合ではありませんわ！！あれが何かはわ  
かりませんが北郷軍ということには変わりませんわ！

だからとりあえず全軍突撃ですわ！！」

とエン紹にしては至極マトモなことを命じた。

他の兵士達も正氣に戻り、命令通り突撃した。

段々近付くにつれ、明らかになる敵の大きさ。その姿からは何故か威圧感を感じた。

そんな威圧感を無視して敵艦に近付く。

あと少しで火矢の射程圏に入ると思つていたら突然前方の敵艦隊から

ドドーーーン！！！

という凄まじい音が鳴り響いた。

何だ？と思つていたら何かが降つて来た。

ヒューッン！

という聞き慣れない音が聞こえたと感じたら突然！  
ダダーン！！！

と味方の船が何かを食らつた。

訳も分からず呆然としていたら前の方の船は死体の山となり、その船は浸水していた。

何ヶ所も穴が開き、そこから浸水していた。  
そのせいかその船は動きが鈍つたため、後ろの船に追突された。  
その追突でまたその船は傷つき、今にも沈みそうだ。  
そこに

ドドーーーン！！！

ドドーーーン！！

とまたもの凄い音が今度は二種類が響き渡つた。

そしてまた何かが落ちて来て今度はさつき食らつた船と追突した船が食らつた。

追突された船は遂に耐えきれず沈んだ。  
気付いた時には前方の艦隊はほぼ全滅していた。

後方にいた艦隊が恐れを感じたのか撤退しようとしていた。

「何をしていいのですか？！戦わずに逃げるなど許しませんわ！」

とエン紹が叫ぶが後方の艦隊は「そんなの知るか！」と言わんばかりにして逃げようとしていた。

エン紹が再び叫ぼうとしたらその逃げようとしていた艦隊が突然燃え上がった。

突然火に焼かれた兵士達は暴れ周り叫び声を上げている。その暴れ周るせいで周りのものや兵士達にも燃え移る。

何が起きたか分からぬエン紹は呆然としていたら。

燃え上がっている艦隊の後ろからまた

ドドーン！

と大きい音がした。

若干、先ほどの音よりは小さかったがそれでも大きな音だ。その音が響いて、後方の艦隊は燃えている船と幸運にも燃えなかつた船が沈んでいく。

187

何かよく分からぬが分かることは困まれたことだ。

前方にはとてもなく巨大な船。

横には大きな船。

後ろにはそこそこ大きな船。

まさしく囲まれたことが分かる。

このまま帰してくれそうに無いのでエン紹は

「皆さん！！私達はこれから前方の大きい船に突撃します！！」

と叫ぶ。

斗詩さんが何か叫んでいるが聞いている余裕は無い

「私達は完全に囲まれていますわ！！だから敵総大將が乗つてているだろう前方の大きい船を攻めて、もしその船に北郷さんが乗つていれば形成逆転出来るかもしませんわ！！

それに…どうせこのまま逃がしてくれそうにありませんから…

そのこと突っ込んで敵に田にものみせてやりましょ「う……！」

その言葉でエン紹軍の士気は最高潮に達した。

エン紹の演説が終わり、全艦隊が北郷艦隊に突っ込んでいたら北郷艦隊もこちりに来た。

進む速度は遅いがその分威圧感を漂わせる。

その威圧感をものともせずエン紹は

「全艦隊突撃――！」

と命令を下した。

その瞬間、敵の包囲陣から一斉に

「ダダダダ――――ン――――！」

と今まで最も大きい爆音というに相応しい音が鳴り響いた。

その音が鳴り終わつたその時、エン紹は何か鉄の塊を全身に浴びて  
その生涯を終えた。

エン紹が死んだおかげでエン紹領は簡単に墮ちた。

というより降伏して来た。

エン紹と一緒に冴能な武将は全員死んだのが効いたらしい。  
そりゃあそうか。

エン紹みたいな無能な王は滅んでも大した影響無いけど、冴能な武將でもあり官吏でもあつた顏良が死んだのが痛かつたらしい。  
エン紹が海戦の後に洛陽占領を計画していたから船には水夫の他に兵士も大量に積んでいた。

その兵士も全滅した今、俺の軍と戦える訳ねえからな。

降伏は当たり前だ。

降伏してからは貴族や特権階級の者達が必死に媚び売つて來たけど  
関係ない。

全員國家荒廃罪で死刑だ。

家族諸とも。

反乱の火種は少ないほうがいい。

さて、旧エン紹領を改善しなくては。

まあ、何時も通り公共事業で雇用を満たし。

農園を作りまくる。

軍を拡大して満州族の侵略を防ぐ。

反乱者は北郷教の信者達に皆殺し命令を発令する。

もはやルーチンワークだな。

まあ、これで民衆は満足するから楽で良いけど。

さて、いよいよ最後の敵、劉備だ。

と言つても正面から行つても普通に勝てるしな。

王である劉備は忍の手で麻薬漬けになつたらしいし。

今では「」飯（麻薬）のためなら何でも言つことを聞くくらい。やはり曹操のように耐えられなかつたか。

曹操は鉛だつたけど決して理性は失わなかつた。

今考えてもアイツ人間とは思えない。

早めに殺しといて良かつた。もしもアイツを最後まで残してたらとんでもない脅威になつていただろつ。

まあ、死んだヤツのことを考えても仕方が無い。今の敵を考えよつ。

現在、最も厄介な敵は諸葛亮と鳳統だ。

あの口リコンビが劉備軍で唯一の脅威だ。

他の關羽や張飛など武将はタダの戦鬪狂の猪だ。

鉄砲で迎え撃てば問題無い。

しかしあのコンビは厄介だ。

今更策でこの兵力差を覆せるとは思えないけど、何考え出すか分からぬから今のうちに潰しておこう。

幸い手駒はあるんだから。

それで、あのロッコンビに終止符を打つか。

劉備の国に潜入した忍に特別製の薬を渡す。この薬が勝利の鍵だ。

劉備は思考が上手く出来ないでいた。

寝ても覚めても思い出すのはあの親子の家で食べたご飯のことばかりだった。

最初は一週間に一度行くか行かないかだったのが段々と回数は増え、今では1日一回は必ず行き、下手をすれば二回も行った。あのご飯を食べれば幸せになれる。今の悲惨な状況を忘れられる」と劉備はハマった。

その行動の奇妙さから流石に忙しい諸葛亮や鳳統も気になり始めた。明日にも監視を付けよ。と思わせるほどだった。

忍はその情報を掴み。

今日決めることにした。

待っていると程なくして劉備が来た。

「ご飯……。食べに来ました……。」

薬が切れたのか憔悴している劉備。

だからんとして椅子に座った。

何時もなら直ぐに料理が出て来るが今日は違った。

「劉備さん、お願いがあるんですけど」

忍は笑顔で言つ。

「お願い……？それよりもご飯を……」

目が虚ろになつてゐる劉備。

完全に正氣は失つてゐる。これはイケる。

「はい、そのお願ひをえ聞いてくれれば直ぐにご飯を上げます。」

忍は笑顔で言つ。

そして酒を机に置く。

「このお酒を諸葛亮様と鳳統様に振る舞つてください。」

忍が告げる。

「朱里ちゃんと雛里ちゃんと……？」

僅かに疑問を投げかける。

「はい、日頃頑張つている一人にと言つて、劉備さんが買つてきたと言つてください。」

「私が……？」

劉備がどうでも良さそうに聞く。

ご飯（麻薬）以外はどうでも良いらしい。

「はい、劉備さんが日頃の激務を心配して買つてきたとでも言えれば二人から感謝されますよ？」

というふざけた理由だが今の劉備にはどうでも良い。

「うん……。分かった……。だからご飯を早く。」

段々劉備も我慢が出来なくなつて来たのか、視線がヤバくなつてきた。

「はい、分かりました。今すぐに。」

忍は料理を作らうとしたが突然思い出したように

「そうそうー忘れる所でした。大事なことを伝え忘れる所でした。」

忍が劉備に近づいて

「諸葛亮様と鳳統様の飲む所を確認してくださいね。」

念を押すように言つ。

「飲む所……？」

劉備が聞く

「はい、せっかく買つてきたのに、もしかしたら忙しそうで飲むのを

忘れるかも知れないじゃないですか？

だからちゃんと飲む所を確認してくださいね。と言つても劉備さんの目の前で飲むのは臣下として難しいですから。首脳陣の皆様で酒宴でも開いてください。

名目としては「北郷が攻めて来るかも知れないから士氣を上げるためにみんなで飲もう。」とでも言つてください。きっと皆様喜んでくれますよ？

忍が笑顔で言つ。

劉備は回らない頭になる程、と思つた。

最近雰囲気が暗いから気分を上げるために良いかも。

そう思つていたが、目の前のご飯が出てきたせいで全てを一皿置いといて今は食べることを優先した。

凄い勢いで食べ終え、劉備はようやく上機嫌になつた。  
表面上は元に戻つたが頭の中は明日の「飯で一杯だ。  
そこに忍が

「では、お願ひしますよ？」

酒を渡してきた。

劉備は深く考えずに

「分かりました！」

と上機嫌で酒を持って帰つて行つた。

忍の親子は急いで撤退した。

あの酒を渡すことが最終指令だったからだ。

劉備は城で主要な人物に忍に言われた通りに酒宴に誘つ。

最近暗くなつて来た状況打破と、士氣向上の名目の久しぶりの酒宴は全員が参加した。

何人かは劉備が酒宴を開くことの珍しさから疑問も浮かんだが、みんなのことを考えてくれていたことが嬉しくて無視した。

来たる北郷との決戦に向けての酒宴には城のほとんどの人が参加した。

忍から貰つた酒を自分が想いを込めて買つたと言い。

全員でその酒で乾杯した。

変わつた味だが美味しい酒と評判は良かつた。

どんどん他の酒や料理を食べていつて全員が気分が良くなつていった。

その日は全員が上機嫌のまま、その日を終えた。

次の日、異常は訪れた。

なぜか全員が情緒不安定になつて体が動かしにくかつた。

そう、あの酒には高濃度の麻薬と鉛、水銀が入つていた。麻薬で味が良いように思わせて沢山飲ませて、翌日になれば体中に鉛や水銀が周り人間として終わりを迎える。

これで国は終わつたも同然だ。

後は待てば良い。

自然に俺に助けを求めるしか無い状況になる。

予想以上の出来だ。

ロリコンビだけでも良かつたけど劉備の首脳陣はほぼ壊滅だ。  
良い仕事をした忍びには特別報奨をやろう。

さて、劉備の国はもはや終わつたも同然だ。  
無政府状態で治安は最悪だ。

劉備は忍の家を必死に探ししているらしいがもつ存在しない。  
撤退の際に壊したんだから。

他の奴らは鉛で頭がイカれて暴れ回っている。  
まあ、水銀のせいでのクな被害も出せないが。  
ロリコンビは死んだらしい。

あの小さい体では高濃度には耐えられなかつたようだ。

よし、これで攻める口実と必ず勝てる確信が持てた。  
ソッコー攻めよう。

1日保つかな？

保ちませんでした。

1日どころか一時間も保たなかつた。  
史上最短の占領だな。

劉備兵達は全員降伏するし、残つたのはイカレた武将達。  
全員鉄砲で死んだけど。

マジで動物狩つてると変わらなかつた。

一応、劉備や首脳陣は処刑したけど最早人間の動きはしてなかつた。四つん這いで歩くものや、ゾンビのようにゆっくりフラフラと歩くものなど、何かバイオハザードを思い出した。

処刑は終わり。

首都新野の演説台に上がる。

首都を覆い尽くさんとばかりの民衆の前で演説する。

「今、ここに――この大陸は北郷帝国によつて統一された――！」

大陸統一宣言をした。

民衆ははちきれんばかりの声で叫び、抱き合つた。

遂に大陸が平和になつたのだから喜ぶ。

「しかし――！まだこの大陸は平和とは言えない――！」

俺は平和を拒否する。

「何故なら――！まだ敵はこの大陸の外に沢山いるからだ――！」

いくら我々が平和宣言をしても、敵はお構いなしに攻めて来る――！

！我々の戦いはまだ終わつた訳では無い――！これから始まるのだ――！

しかし、諸君は心配いらない――！なぜならこの国には強力無双な軍が君達を守つてゐるからだ――！」

それに――！永きに渡つて分裂していたこの広大な大陸が一つになつたのだ――！例えどんな敵が来ようとも必ず倒せるだろう――！私は君達帝国臣民を信じている――！必ず諦めないと――！どんな強敵が来ようとも全員で力を合わせて敵を粉碎しよ――！

大陸統一萬歳――！北郷帝国萬歳――――！

.....。

「万歳――――い――！」

「万歳――――い――！」

「万歳――――い――！」

と今回は仕込んで無いが全員が万歳と叫んでいる。

ついして大陸を統一した北郷帝国はその勢いは衰えず。

満州、朝鮮、モンゴル、ベトナム、インドなどアジアを席巻した。更に軍艦を率いて日本、フィリピン、インドネシアなどの島国も占領した。

中東方面やアフリカの北部、果てはヨーロッパのイタリア半島まで攻め込んでいたがここで止まった。

皇帝、北郷一刀が7~8といつこの時代においては長寿な寿命が遂に終わりを迎えたからだ。

北郷の死によつて北郷帝国は凋落の一途を辿つた。

後継者を決めていなかつたことで大混乱が起きたからだ。

北郷には子供がいなかつたのがさらに響いた。

更に、今までは補給に困つたりしたことが無かつたのに北郷の死後、伸びに伸びた補給線が限界を超えた。

どんどん攻められ、領土を失い、最終的には何とか大陸まで押し留めた。

北郷帝国はその後滅び、また大陸は群雄割拠の時代を迎えるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6016o/>

恋姫？むしろ三国志

2011年7月16日13時58分発行